

本願寺教団の東西分立

——教如教団の形成について——

柏
原
祐
泉

目次

序章	本願寺東西分立の事情……………	七
第一章	「本願寺教如」の立場……………	六
第二章	教如教団の形成……………	九
(一)	教団形成の動向……………	九
(二)	地域教団の形成……………	一〇
(三)	講の成立……………	一七
結章	教如の教団再編成……………	二三

序章 本願寺東西分立の事情

現今における真宗史研究の著るしい発展にもかかわらず、本願寺教団の東西分立の問題に関する近時の研究は、わずかに二、三の成果が示されているにすぎない状態である。それは、一には今迄の分立に対する解釈が、本願寺内部事情の問題とされ、一般的関心に欠けたことによるが、更には、何よりも分立に関する相当数な資料があるにかかわらず、その大部分が東西兩派の相互牽制的な感情論にもとづくもので、信憑性に欠け、事実を究明したいという事情による点が多い。このような牽強付会的資料を整理分析し、直接の関係文書を集め、同時代の一般史料の裏づけによつて、顕如・教如・准如をめぐる本願寺内部の分立事情に歴史的な研究を加えたのは辻善之助博士であつた。また藤島達朗博士は、さらに一步をすすめて、教如関係の直接史料によつて、教如自身の意図するところを究明された。^(一)これらの研究によつて、分立における本願寺の内面事情や、それと秀吉・家康との交渉関係などは、かなり明白にされることができたのである。

右の研究や、あるいはそれ以前の諸業績の中心点は、分立の問題を、主として教団頂点にしぼる方法をとることにおかれた。分派が本願寺内部の動向によつて究極的に成立するかぎり、まず、旧来の俗説的解釈を払拭して、教団頂点の究明につくさねばならないのは当然であつた。しかしまた、分立は教団下部の分裂をも伴うものであるから、同時に、末寺の動向についても視点が向けられねばならないことも、いうまでもない。とくに、東西分立は、織豊期から江戸初期の集権的な封建制再確立期に成立するから、この時期における教団の変革を反映しているものとみるべきである。そして、今日の分立問題の教団頂点への解明は、漸く教団下部との関係での究明の段階に到達したことを示

しているのである。にもかかわらず、この教団下部との関係で分立を考察した業績は皆無である。それは、この要請をみたす直接史料が、殆んど見出されない事情による。しかし、幾らかの断片的な、且つ未成熟な史料を再整理することで、多少ともこの研究方向を推進しようとおもわれる。本論においては、分立の問題を、とくに東本願寺教団側の成立事情にしばつて考察したいとおもうが、そのため、従来の教団頂点への解明方法を今少し進めて、教如の立場を規定し、さらに、教如によつて東本願寺教団が構成される下部の末寺関係の問題について、史料の再整理をおこないつつ論及したいとおもうのである。そのため、まず順序として、分立にいたる現象的な歴史経過の概観からはじめ、更に右にあげた諸氏の業績を再確認することから出発しなければならない。

分立が成立するのは、慶長七年における徳川家康から教如への寺地寄進〔宇野新藏覚書〕、あるいは、元和五年における幕府の右寺地についての公式寄進状によるとされるが、分立問題の萌芽は、すでに石山戦争終結時における本願寺内部の確執に胚胎する。石山戦争は、天正八年三月の本願寺と信長との和議成立により終結するが、この時の斡旋者である勅使庭田重保・勧修寺晴豊に対する両者の誓紙、起請文の取交しに際し、本願寺側では閏三月五日、頭如とともに長子教如も誓紙を提出した。しかし、信長からだした同三月十七日付け近衛前久宛の、和議に対し誠意を誓う旨の朱印状には、「彼方疑心氣遣尤に候歟」〔本願寺文書〕とあつて、本願寺側では、信長の仕事を恐れた有様がよく知られる。そこで、四月九日、頭如は紀州雜賀に退出したが、教如はなお大阪本願寺に留まり、諸国の末寺・門徒に大阪「抱様」について檄をとばして再挙を告げた。これに対し、頭如も門末に退城のやむなきことを説いて、教如に従わぬことを申送つた。すなわち、教如は、「今度当寺信長一和之儀、被応叡慮、既御門主至紀州御退出候。就其蓮如上人已来数代之本寺此度可破滅段あさましく歎入候付、予一身残是非共相拘思立候事候、」〔蓮如上人已来数代開

山之御座所、此度法敵ニ渡置馬之蹄にけかすへき段に余歎入存候之間、……此上者聖人之御座所にて相果候とも満足と存置斗候、^(三)と、強い籠城の意志を示し、これに対し頭如も、「忽聞山尊像をハしめ悉相果候ハ、可為法流斷絶事歎入計候、就其加思案、叡慮へ御請申候、如此相濟候以後、新門主（教如）不慮之企、併いたつら者のいひなしニ同心せられ、剩恣之訴訟、中々過法候、^(四)（カツニ註筆者、以下同様）と、強く制圧をはかつた。このため、頭如はこの頃、教如を義絶した。しかし、六月には大阪本願寺周辺の荒木元清の守る花熊・尼崎や辻・安田の皆も落城したため、教如は信長から和議の起請文を得て、八月二日、「去二日大坂令退出至雜賀在陣候、無念之雖始末候、端城等就令破脚不及了簡如此候、^(五)と、雜賀に退いた。その後、教如は、雜賀を出て諸方を廻り、教団の復興をはかつたようであるが、^(六)天正十三年六月、明智光秀の信長殺害ののち、間もなく叡慮をたのんで頭如・教如は和解した。

ところで、教如の籠城については古来、父子密計説があり、辻博士は更にこれに考証を加えて全面的に支持している。すなわち、教如の籠城は信長を牽制するための父子の黙計によるもので、義絶も信長への面目をたてる手段にすぎないという。さらに辻博士は頭如・教如の消息を分析し、密計説の信憑性について四点をあげている。しかしこの四点の論拠は、何れも推論を出でないものであり、父子密計説はなりたたないものと考えてゐる。辻博士は、^(七)第一に、教如が天正八年の閏三月十三日・二十日・二十一日・二十八日と連続に、紀州雜賀衆に対し本願寺への来援を求めたのに対し、頭如も閏三月二十日・二十七日に雜賀に來援無用を申し送つたが、頭如の二十七日の消息中に、^(八)「内輪之乱出来候事、言語道斷」とある「内輪之乱」は父子の謀略であり、援軍を抑えながら「御迎船并警固之人数早々参上」というのは機微が窺える、という。しかし、この「内輪之乱」が信長に対する父子の対決の相違をいう以外に意味のないことは文中明白であり、「警固之人数」も暗に援軍を求めるのではなく、文意通り、頭如が宗祖像と共に下向する

ための警固を求めたにすぎない。尚、辻博士は、父子密計の結果、顕如の退出前日の四月八日に、雑賀衆から教如の再挙を求めた誓紙であるとして、鈴木孫一など雑賀国人衆十一名の連署状をあげているが、文中の「しかれハ御くしの御事、二のきりまで新門跡様（教如）へあつけまいらせられ可然奉存候」（カッコ註筆者、以下同様）とは教如の他の消息によれば、教如が本願寺籠城について宗祖像の安置を求めたことに対する鈴木孫一などの斡旋を意味するもので、教如が籠城し再挙することを求めたものでなく、この連署状は、ただ顕如の雑賀下向の保全を約した誓紙にほかならない。密計説についての第二には、教如の大阪退出が、さきに顕如と信長とで結んだ和約条件の中の退出期限、すなわち七月盆前という期限からあまり日を経ないことは、教如がすでに七月上旬から退去準備をし、顕如と黙計があつたと考えられるという。しかし、これは顕如退出後の戦況の進展が、教如に七月頃、退出を決意させたわけで、強いて父子密計説をたてる論拠とはならないであろう。同じく第三には、教如が諸方に再挙を促した消息には単に「信長」とあり、顕如が諸方へ教如に不同意することを説いた消息にはみな「信長公」とあるのは、顕如の消息が信長方に発見されることを予期したもので、表面的に教如に不同意を説いたにすぎないという。しかしこのように、両者の消息が同一宛所にだされて、それぞれ内実的と表面的とに使いわけされたというのも、無理な解釈である。同じく第四に、教如が退出のすぐ前に、本願寺の家臣下間判部卿（頼廉）・豊前（頼達）宛にだした七月二十三日付消息をあげ、文中に、「予シン中ハトカクトカク御所様（顕如）シタイニテソロ、ソノハウ（雑賀）ヘマイリソロテモ、マヘ／＼ノコトクニテソロヘハ、イカ、ソロヤ」（二）とあるごときは、父子密計を示すものという。しかしこれも、本消息の末文に「トカク予シンタイハ刑部卿豊前ニマカセソロ、モトメラカケソロマ、ナヲ／＼ヘチキナクタノミ申イリソロ」とあり、教如が顕如への執成しを頼廉・頼達に頼んだ意味以上を出でない。

以上要するに、教如籠城についての父子密計説には無理があるとおもうが、それを更に証するものとして、今少し証左を求めてみよう。一は教如の退出は、先述のような教如に同調した大阪周辺武士の敗退によるだけでなく、雑賀の頭如からの積極的な「調略」があつたことである。すなわち退出後の教如の消息に「從雜賀種々調略之儀候而、内輪之不慮依有之、其以前に取急令退散候^(三)」というが、この雑賀からの調略の内容については、下間頼竜から飛驒の照蓮寺にあてて教如の大坂退城を報じた書状に、「抑今度大坂御退城之儀、從紀州雜賀種々依御調略、御出城数ヶ所落居、其上諸江通路之在々所々、是又御指図有放火、日比之御馳走人等被打果候、……然者既被相果上者、不及御了簡故御扱ニ被立入、俄ニ至雜賀被移御座候^(三)」といつてゐることで明白なごとく、頭如からの工作があつて、「内輪之不慮」により教如退出が促進されたのである。第二に、頭如が四月九日大阪本願寺退出直後に、頭如やその家臣から諸方へ出した消息に、^(四)教如の本願寺籠城は頭如が隠居して教如に継職を許した故であるとの噂を、極力打消しているが、この噂は、少なくとも教如方で強い籠城の意志を示したことを物語るものであり、一時的な密計による籠城でないことを物語るものである。第三に、頭如が退出直前に直接教如に宛てた消息に、「連々敵可為表裏と覺悟せられ内輪之騷被思立候事、不覺不可過之候、……予が心中ニ拘様不反了簡候、」と強く教如の「抱様」を抑えたのに対し、教如は、「当寺相果候へば雜賀も程ある間敷候、是ほど眼前の表裏をも思食付られぬ事は能々の時刻到来と存候、哀れ御心得参候而、御退出之儀思食被留、今少御拘様も被及思食かしと念願斗候、」と返答し、さらに、もし然らずんば自分と誓詞を以て覺悟をきめた味方中と籠城するといつてゐる。^(五)かくして、頭如と教如とは大阪本願寺の問題に、全く意見を異にしていたのである。以上、教如の籠城に関し、父子密計説の否定に拘泥したのは、この父子の対局の相違に、後の本願寺分立の動因があつたことをするためであつた。なお、頭如の教如義絶についても、信長に対して父子密計

をつくろう表面的な方便で、したがつて信長没後直ちに義絶が解かれたとする方便説があるが、密計説が否定されればこれも成りたたなくなる。すなわち、義絶は信長を対象とする対決の相違に因つたから、その対象がなくなれば義絶が解かれるのは当然であつた。しかし実際には、すでに教如を中心とした新しい教団の動きがめばえていたのであり、これについては後に考察したい。

さて、顕如はその後、秀吉と協調、援助を得て、本願寺の寺基を、天正十一年七月雜賀から泉州貝塚へ、更に同十三年八月大阪天満へ移し、そして同十九年八月には京都堀河七条に確立するが、翌文祿元年十一月二十四日に示寂している。そこで同年十二月、教如は秀吉の意により本願寺を継職するが、翌二年閏九月、再び秀吉の命で退隠し、弟准如が継職するのである。この教如退隠の直接の動機は顕如の室如春が、准如への顕如の讓状なるものを秀吉に示し、教如の退職をもとめたことによるが、秀吉が教如を退職させた理由には、古来種々の臆説がある。しかし一応注意しなければならぬ理由としては、如春が教如の側室教寿院（お福）の所出に継職されることを止めて准如の継職をはかつたということ、および家臣間の軋轢が強く作用したということである。このうち、とくに家臣軋轢の問題は、教団頂点における本願寺分立の最も大きな契機となるので、少しく考察を重ねてみたい。

「駒井日記」には、秀吉が教如を責めた理由や退隠後の進退について定めた条件十一カ条を記録しているが、そのなかに「一 先門跡せつかん（折檻）の者被召出候事、一 被召出候人よりも罷出候者共不屈思召候事（二）」とあつて、教如が、顕如により折檻された者を召出したこと、召出した教如よりも召に応じた者が不屈と秀吉が責めたこと、をいつている。この顕如折檻の者を召出したことについては、「表裏問答」によると、教如が、「抱様」をすすめて顕如から勘気をうけた八十余人を、顕如没後直ちに召出したこと、また「父上人のサタメヲカレシ定衆誓願寺定専坊二人ナカラヲ

シコメラレ、御勘氣ノ福田寺端坊定衆トナル、下間少進仲之御奏者メシアゲラレ御勘氣ノ按察使ニ老トナル」(上巻) ことなどで、さきに教如が顕如から義絶された際、同じく勘氣をうけた教如方の定衆僧侶や家臣のことをいうのである。このことは、すでに顕如在世中から、有力末寺や上層家臣の分裂があつたことを示している。この有力末寺の分裂が教団分立に發展することについては後述に俟つが、家臣の分裂は、辻博士の指摘するごとく、准如方家臣と如春との結合によつて教如退隱をせまる結果となり、教団分立の上部の条件を決定づける動機となつたものとして、注意しなければならぬ。さらに教如方家臣の形成については、「宇野新藏覚書」によれば、まだ「天満にて教如様御かたずみの時」に、末寺の「内証ニテの御礼衆之披露」を栗津右近・元辰・松尾左近・元貫などの家臣が取つぎ、その頃、宇野新藏などが召出されたといひ、本願寺の堀河七条移転後も、「内証ニテ」右近・左近・孫作・三郎太郎などが教如に取つぎをしたという。また同書には、「表裏問答」と同じく、文禄元年教如繼職後、さきに顕如が折檻した下間擦察使頼竜を奏者とし、顕如に従つた下間少進仲之を折檻したことを述べ、またその頃、武家奉公中の横田河内を召出したといひ、更にまた、教如が文禄二年隱居して後にも、先に天満時代に教如に仕えた栗津之辰を召出したといひ、(二七) なお、顕如が天正八年に大阪退出を加賀門徒衆に報じ、加賀の「弓箭之行可相止」を命じた消息中に、「寺内織部井上善五郎二人事罷下、狼藉之働前代未聞曲事次第候間、速可令成敗事」を申送つてゐるが、この寺内・井上は共に後に教如方につく家臣と思われ、(二八) すでに大阪「抱様」の問題を契機として、家臣団の分裂が始つてゐることを示してゐる。(二九)

さて、文禄二年退隱後の教如は、「裏方」「隱居」などによばれ、堀河七条の本願寺々域内に塾居の形式をとる。しかし事實は、この後も従来通り教如の法主的活動は繼續するのであり、また地方末寺の教如への求心的運動も活潑

におこなわれているのであつて、これについては章を改めて考察したい。そしてついに教如は、慶長七年頃、家康から烏丸七条に寺地を得て、翌年東本願寺を建て、事実上、寺基を確立するのである。しかしなお名目的には隠居の形式をとり、漸く元和五年宣如時代に至り、將軍秀忠から寺地安堵の朱印状をえて、一派独立を公認されるのである。^(三)なおここで、家康の寺地寄進について、古来家康の本願寺二分策によるとする説があり、辻博士はこれを否定されたが、これについても、二分策はともかくとして、尚考うべき余地があるので、次章で触れてみたい。

第一章 本願寺教如の立場

本願寺分立の過程は右に考察したごとく、すでに織田政権に対する大阪の石山本願寺「抱様」の問題に胚胎し、のち本願寺継職や家臣分裂の問題に豊臣政権が介在し、さらに徳川政権の援助によつて分立するという、本願寺を中心とした政治的変移によるものであつた。それは、織豊期から幕藩制成立期にかけての政治発展の過程で、きわめて自然に進行したごとくみうけられる。しかし、ただ継職問題や家臣団の分裂という本願寺の内部事情だけで、分立に至る筈はないわけで、当然、教団全体の分立が伴うわけであり、それが集権的封建制成立の過程で進行した事情を究明することこそ、中心の課題とされなければならない。しかし、全教団の分立が可能となるためには、その中心をなす教如側に分立の条件が用意されているべきである。分立は、教如側の条件が集権的封建制への政治的、社会的発展の過程で満たされたとき、はじめて可能となつたのである。その教如側の条件とは、まず教如自らの法主的活動であり、更にそれに伴う地方末寺の教如への求心的運動である。本章では、とくに教如の法主的活動に限つて考察したいが、この問題については、すでに藤島達朗博士や上場謙澄氏によつてすぐれた研究が発表されているので、ここでは、こ^(四)

これらの研究を敷衍しつつ、更に二、三を補足し、論旨を發展させてゆくこととする。

まず、教如の法主的活動の中心を占めるのは、末寺に対する裏書下付である。元来、本願寺における裏書は、本尊や歴代絵像（御影）などを末寺に下付する場合、証判として法主自身で直書書判するものであり、「本願寺作法之次第」に「本尊御影うら書を末寺の人書たるは有べからず候」というごとく、^(一五)本願寺法主や法主代行者にのみ可能なものであつた。したがつて裏書下付は、本願寺の末寺統制を意味することともなつたが、逆にいえば、それは法主権ないしそれに準ずる立場をも明示する性質をもつた。教如の裏書下付については、「宇野新蔵覚書」に、「頭如様御存生之内は、木仏・御開山様・御代々之御影様、何も其外遊し被出候により、教如様へ屋ずみの時は、御ゆるしにて、御本尊之御うら書・御名号・御文の御判、此分斗被遊出候」とあり、すでに「部屋住」時代、すなわち少なくとも文禄元年継職以前に、頭如の許可をえて、法主代行者として実施していたことが明白である。今日、右継職前の教如の裏書下付は十六点が確認されている。^(一六)但し、このうち右にいう「御本尊之御裏書」は一点だけである。しかし、「集古雜篇」には「教如上人ハ御弱年ノ時ヨリ頭如上人ノ御許免ニテアソハサレシ御筆物勝計シカタシ、若疑敷ハ御筆蹟年号等ヲ考テ知ルヘシ、」とあつて、^(一七)恐らく近世初期には、教如継職前の諸種の裏書下付が存在していたものとおもわれる。右十六点の裏書には、「大谷本願寺积教如」「本願寺积教如」「积教如」などと証判し、自ら本願寺法主権の代行者であることを明示している。なおこのうち、とくに天正八年大阪退出から同十年六月の頭如・教如和解までの間の裏書下付は、教如義絶中のもので、その間にも依然として教如の法主権代行の意志を示すものとして、注目すべきである。^(一八)つぎに、文禄元年十二月継職から翌二年閏九月隠居までの裏書下付は三点が確認されているが、これは法主として当然の事柄である。同じく「大谷本願寺积教如」「积教如」の証判がある。つづいて問題になるのは、文禄二年閏九月

隠居から慶長八年東本願寺建立までの隠居中十年間の裏書下付である。この間のものは最も多く、現在、二十六点を確認している。⁽⁸⁰⁾これらの裏書には「大谷本願寺釈教如」「本願寺釈教如」と証判のあるものが大部分で、とくに本願寺の法主的地位にあることを明示しており、藤島博士がいわれるごとく「教如自身隠居の意識にあつたといふことは出来ない」⁽⁸¹⁾のであり、隠居中にもなお法主的活動を継続したことを示している。以上のごとく、分立にいたるまでの教如の裏書下付は三期に分つて考察しうるが、とくに第三期の隠居中のものは、第二期につづく教如の法主権の主張を意味すると同時に、このような主張を打ちだした裏書下付を求める末寺教団の分裂が、少なくとも第三期から急速に進捗していたことを物語るものに外ならない。

つぎに、裏書下付につづいて注目すべきは、教如の寿像下付である。真宗における初期の寿像は、元久二年、宗祖親鸞が師法然から「選択集」の書写と共に真影図画を許され、それに銘文を加えられたのに始る。更に親鸞の寿像には、専阿筆鏡御影と朝円筆安城御影とが著名であり、とくに後者は門弟專信房專海が建長七年に、親鸞の恩許をえて「教行信証」書写と同時に朝円に画かせたもので、親鸞の法然寿像図画の場合と揆を一にしている。⁽⁸²⁾すなわち、寿像は元来、教法の伝持と共に許されるものであり、門弟が師の現身を仰ぐためばかりでなく、法の相承を面授するといふ重要な意味をもつものであつた。ついで蓮如の時代においても、寿像は特別に尊重された。蓮如は三十三歳の時寿像の下付を始めたといわれ、それは順如・蓮乗など子弟に与えられたが、六十歳頃からは「あまた人々被申候間、あまたかゝせらるゝ」(「本願寺作法之次第」)に至つたという。しかし一般末寺への下付は、「ソノ御代ニムマレアヒタマツル機ハ、アハレノ御寿藏⁽⁸³⁾ヲソミ申、コ、ロサシタヘス候ヘハ、一期ノイノチヲカキリ御免モアレカシト心底ニウチヲキ申ヒマモナク候」というごとく、容易には許されないものであり、下付をうけた門下は「メテタクアリ

カタキ御慈悲ナリ」(「本福寺由来記」)と感戴しているのである。また、近世における本願寺の寿像取扱いについてみれば、元禄頃においても寿像下付は深重を極め、また幕末でも特別な場合に末寺に褒賞として下付された例がある。^(三三) このように重視された寿像を、教如は数多く下付しているのであるが、それは、教如が下付対象となつた地方教団との密接な結合を意識してのことであり、またその下付を求める教団側の教如への強い傾斜を示すものである。下付をうけた教団と教如との結合については次章で考察することとし、ここでは、筆者が現在確認しえた限りのものを列挙するにとどめたい。なお、寿像下付は右の如く、先の歴代影像などの裏書下付とは異つた重要な意味をもつので、^(三四)慶長八年東本願寺建立以後のものも、すべて掲載しておく。なおまた、左の列挙に明らかなごとく、現在では慶長六年のものを上限とするが、これは同五年関原合戦を境として、とくに教如の教団形成がより一層進捗したことを推測させる資料となるであろう。

教如寿像下付裏書一覽表

近江

- (一) 慶長六年四月十五日、「江州浅井郡坂田郡惣道場也」(東浅井郡湯次 満徳寺藏)
- (二) 慶長六年十二月五日、「江州浅井郡海津岩谷町願慶寺常住物也 願主釈慶尊」(高島郡海津 願慶寺藏)
- (三) 慶長九年六月十日、「江州坂田北郡上坂中ノ道場授法寺 願主願心」(坂田郡上坂 授法寺藏)
- (四) 慶長十年四月十六日、「江州浅井郡宮部村 願主釈尊乘」(東浅井郡宮部 勝円寺藏)
- (五) 慶長十三年(以下不詳)、「江州浅井郡□□□常住物也 願主□□」(東浅井郡留目 願教寺藏)

本願寺教団の東西分立

(丙) 慶長十五年三月十九日、「江州浅井郡香花寺村本誓寺常什物也 願主釈慶信」(東浅井郡香花寺 本誓寺藏)

(戊) 慶長十八年七月六日、「江州浅井郡円光寺常住物也 願主釈了善」(東浅井郡新居 円光寺藏)

(丙) 慶長□年十一月十五日、「伊香郡明楽寺長照寺等坊主宛」

(戊) (伝 慶長五年頃) (坂田郡榑畑 緑苔寺藏)

(己) (伝 慶長五年頃) (長願寺等二十二寺宛) (坂田郡南田附 長願寺藏)

越中

(一) 慶長七年二月十八日、「越中新河郡布西保生地村専念寺常住物也 願主釈祐正」

(二) 慶長十二年十二月九日、「越中国利波郡五ヶ山下田村西勝寺 願主釈明恵」(東礪波郡下田 西勝寺藏)

加賀

(一) 慶長六年七月十日、「(願主慶栄) (金沢市専光寺藏)」

(二) 慶長六年十一月□ (金沢市上宮寺藏)

(三) 慶長十一年七月九日、「加州石川郡倉月庄内諸江村正覚寺常住物也 願主釈長玄」(金沢市 正覚寺藏)

美濃

(一) 慶長十一年、「(美濃北山通十日講宛)」

三河

(一) 慶長九年八月十八日、「勝万寺門徒三州幡豆郡羽角郷専念寺 願主釈信空」(羽角 専念寺)

(二) 慶長九年十二月十三日、「三州幡豆郡東成中野浄福寺常住物也 願主釈尊敬」(牛久保 浄福寺)

(三) 慶長(十二)年□月十一日、(三州額田郡岡崎郷随専坊常住物也 願主釈蓮知釈敬心」(岡崎能見町 寛恩寺) 尾張

- (一) 慶長六年十一月二十八日、「勝万寺下尾州中島郡東五城村 願主淨心」(東五城村 愍重寺)
- (二) 慶長八年六月十三日、「勝万寺下尾州愛智郡北一色 願主釈海善」(北一色 善行寺)
- (三) 慶長八年七月二十九日、「尾州中嶋郡神戸村勝万寺下 願主釈淨雲」(野荷 円光寺)
- (四) 慶長八年八月十八日、「三州勝万寺下尾州愛智郡兼竹中野村 願主釈法西」(中野 長円寺)
- (五) 慶長八年十一月二十八日、「勝万寺門徒尾州中島郡登村 願主釈正信」(下起 忍順寺)
- (六) 慶長九年八月四日、「勝万寺門徒尾州中嶋郡木全村 願主釈応宗」(木全 教円寺)
- (七) 慶長九年十月十二日、「勝万寺門徒 願主釈淨誓」(戸田 西照寺)

つぎに、他の一連の法主的活動を示すものとして注意しなければならないのは、聖教の開板である。すなわち、すでに慶長四年に「正信偈和讃」四帖を開板して教如の証判を付しているが、これは文明五年蓮如開板本を初めて覆刻したものである。^(三六) また、蓮如の「御文」も実に二十五種の異本による開板を行つたことが知られており、この内には慶長八年東本願寺建立前のものもあるものと推察しうる。なお、「御文」では、慶長七年下付と伝える教如証判本も現存している。^(三七) このように聖教に証判することは、「実悟旧記」に「前任上人(実如)の御安心も御文のごとく、又諸国の御門徒も御文のごとく信をとられよ、との支証のために御判をなされ候」というごとく、本来、法主が門末に信心の支証を与えるためであつたが、それはまた、法主としての立場を明確に示す意味をもつものでもあつたのである。さて、以上のように隠居中に頻繁な宗祖・歴代影像や寿像などの裏書下付、あるいは聖教開板などが行われるため

には、すでに充分な教如所屬の絵所などが整つていたことを推察させる。「宇野新藏寛書」に、「教如様御隠居被成、木仏・御開山様・代々の御影様、万申物御免被成候衆、按察・治部卿・右近・左近・嘉兵衛・河内、此衆迄にて候」といつて、教如隠居中に、教如から末寺への各種裏書下付を按察などの家臣が取次いだことを述べ、更にまた、「太子・七高祖之御礼銀」のことに触れているのも隠居中のことと考えられ、隠居中の裏書下付にすでに御礼銀の基準が一定していたことをするのである。さらに同「寛書」には、「教如様御隠居被成、如前北のかみさま(母如春)と御入替り被成候而、事靜に成候而後、……御堂之御門御亭の御門、えび(錠)をおろされ、台所門之くより斗あけおかれ候、雖然と御堂之勤行無懈怠御參被成候」(「慶長三年正月」北のかみさま……十六日ニ御往生被成候、……七条河原に火屋立候而御喪礼御座候、教如様も御出被成候、御供には京中御門下衆歴々五六百人も被參候、教如様の御輿折かこみ我一く与御供被申候、扱理門様(准如)方之焼香悉相濟候而、此方より香炉御出し候而御勤なかばに教如様御焼香被成候、……御喪礼之後教如様、御堂にて五日之御法事御取行被成候事、)「いばらきに御座候絵像之御開山様は、教如様御へ屋ずみ之時、御堂に御かけ被成候、」などとあり、これらの記事はいずれも、文禄二年閏九月、教如が隠居して堀河七条の本願寺域内の一角に居を占めて以後に関するものである。ここに度々散見する御堂は、准如が継職した本願寺の影堂や本堂そのものを指すのではなくて、教如自身で別に御堂を建立していたことを物語るのである。その規模は、勿論することはできないが、恐らくそれは本願寺の寺域内にあつたものであり、右の記事によれば、御堂のほかに亭・台所門などもあり、御堂には、木像に代つて絵像の宗祖像がかけられていたのである。また、慶長六年の報恩講や、慶長七年一月の如春・寛如の法事などを勤めたのも、この御堂においてであつたと思われる。さらに同「寛書」には、「大御所様(家康)御代に当寺内御拝領被成、西より御堂万御引被成候」(同)とあり、慶長七年に教如が烏丸七

条の地を得て西の堀河七条寺域から移り、その時、右の御堂などの建物を移したことをしるのである。そしてこれらの建物が、新寺地に移り終るのは、翌八年六月初旬頃であり、同年末の新本堂建立までの仮御堂となつた様である。^(四四)

なお、「紫雲殿由縁記」に「慶長九年將軍家康公思召アリ、教如公新ニ屋敷地拝領アリ、御造作相調ヒ四月六日御裏ヨリ御移徒、……教如公乗興ニテ御供並ニ御家頼御門徒ノ僧俗數百人供奉、雜賀商人、天満ノ茶店衆、其外、絵屋、表紙屋御供……」というのは、右の慶長八年六月移徒のことに該当するものとおもわれ、これによれば、教如と共に町衆や絵屋・表紙屋なども東本願寺域内に移つたのである。そして、ここにいう絵屋・表紙屋は絵所の絵師・表具師の類とおもわれ、すでに教如隠居中に教如に属する絵所があつたことを推察させる。さきの種々の裏書下付などは、このような絵所があつて、始めて可能であつたのである。

以上によつて、教如が隠居中にすでに御堂を持ち絵所などを付設し、諸々の法主的活動を活潑に実施していたことが明白であるとおもう。隠居後は一応「裏方」としての名目をたてたが、実際には文禄元年十二月——二年閏九月の間を継職した、殆んどその時のままの態度を堅持しているのである。そしてそれは、教如自身の法主的自覚によることは勿論であるが、何よりもそれを支える末寺教団の要望に応じたものであつたのである。現在、大阪の大谷派難波別院に、「大谷本願寺 文禄五丙申曆林鐘下旬第四日」の銘をもつ洪鐘があり、これは同別院の記録では、教如が文禄四年大阪渡辺に堂宇を興し翌年鑄造したものというが、隠居中の教如が「大谷本願寺」を本願寺故地近くに復興する意志を打出す可能性のあつたことは、以上の諸事情から充分推察しうるところである。^(四五)

つぎに、教如と家康との交渉関係を考察しておきたい。さきにも触れたごとく、家康が烏丸七条の地を教如に寄せたことは、古来、本多正信の献策による本願寺勢力の二分策とする説があり、辻博士はこれを「想ふに幕府が教如に

地を授け寺を建てしめたのは、さのみ重大なる意味のある事ではなくして、たゞ一時便宜の処置に過ぎなかつた」と否定された。しかし、以上のような教如の法主的活動と、更に次章で考察するような下部教団の分立状態を考慮に入れて、教如と家康との交渉を再考すると、本多正信の建策はともかくとして、家康の寺地寄進は、たんに「一時便宜の処置」とはいいきれない、大きな政治的意味をもつたものと解せざるをえないのである。以下、慶長八年教如が烏丸七条に移るまでの家康ないし幕府との関係を、逐一再考察してみよう。

通例、分立に関する教如と家康との関係は、慶長五年関原合戦を契機として始まるものと説明される。しかし、両者の関係は、すでに三河における永禄一揆後の教団変化の過程ですすめられているのである。三河の本願寺教団では、一家衆本宗寺と上宮寺・本証寺・勝鬘寺三河三カ寺など有力末寺とは対立関係にあつたが、永禄六年の一向一揆には共に協力して家康にあたつた。そして一揆敗北後はいずれも三河を追われたが、二十年後の天正十一年十二月に本宗寺が、同十三年八月頃に三カ寺以下の有力在地末寺が、ようやく復歸することを許された。しかし、すでに天正八年には本願寺が大阪を退転し、また三河教団ももはや従来⁽³²⁾の武力をもたないで、家康の領国支配体制のなかに組込まれていた。しかしなお、本宗寺と上宮寺・本証寺・勝鬘寺三カ寺との関係は一致せず、三カ寺は教如につくのであるが、その結果、自ら教如と家康との接近がすすむのである。それは天正十五年の教如の三河下向に始まる。⁽³³⁾このとき、本願寺家臣下間頼廉から三カ寺に教如下向を報じた書状は次のごとくである。

〔前略〕如仰今度新御所様（教如）被成御下国候刻於其元別而御馳走之由御造作之御事候、将亦其国新門徒新道場被改ニ付而御氣遣之由尤候、乍去内証無別義之由珍重存候、内々自是可申入存候処遮而被示越候、不及申候へ共万端無御越度様ニ御分別専用存候、先年家康へ一札之金子未進火急ニ可被出置候旨被申懸候由、時分柄各難堪候事候、何と候て御才覚候て御理簡用存候、坊^(断所要)

主衆も右之通申越候、可然様ニ御入懇專一存候、恐惶謹言

六月十八日

頼 廉

勝万寺殿・本証寺殿・上宮寺殿 (四七)
御報」

すなわち、これによれば、三カ寺などの有力末寺が三河復帰後、家康から、配下の新門徒新道場の検分をうけ、また札銭醸出を求められたことがわかり、したがって教如の下向は、家康と三河教団との調整を目的としていたようである。なお家康への札銭醸出に関して、三カ寺と本宗寺との間に紛糾があり、また教如下向の受け容れについても両者に対立があり、その結果、上宮寺が教如下向先に決定したのである。(四八)このように、教如の下向を契機に三カ寺と本宗寺の対立がより著るしくなつた結果、教如を迎えた三カ寺側は、のち教如が隠居中に、教如につくことを表明するのであるが、これについては次章で再説したい。要するに、天正十五年の教如の三河下向を契機として、家康に復帰を許された三カ寺と、家康と三河教団との調整を目的として、三カ寺に迎えられた教如との関係を通じて、教如と家康との交渉が深められたことを推察しうるのである。

さて、このような前提があつて、関原合戦を動機として、教如と家康の関係はとくに密接となる。以下、これを年譜で示してみよう。

慶長五年四月二十四日、教如大阪へ下向し家康に謁す〔粟津日記〕……以下〔粟記〕。六月十七日、教如伏見城の家康を見舞〔粟記〕。(翌十八日、家康は会津の上杉景勝を討つため伏見城を出発している。)七月二日、教如関東へ下向して家康を見舞い、八月十七日帰京〔粟記〕・〔永日記〕・〔華頂要略〕。(この間、准如は七月七日出京、十日近江佐和山の石田三成を見舞い帰京)〔慶長御日記〕。(この後、九月一日家康は江戸を発し同十五日関原合戦、二十七日

大阪城に入つた。〕 同月二十日、教如家康を近江大津城に迎え対面〔粟記〕。

慶長六年八月十五日、教如家康を伏見城に訪う〔七条日記〕。翌日家康京都屋敷へゆき、帰途教如を訪う。土産銀二百枚白布三百端〔粟記〕。翌十七日、教如伏見城の家康へ返礼に出向〔同〕。

慶長七年〔二月頃〕家康、教如に烏丸七条の寺地を寄す〔宇野新藏覚書〕等。十二月二十二日、教如江戸から西上の家康を近江に迎う〔粟記〕。

慶長八年一月〔三日、教如厩橋妙安寺の祖像を迎う〕〔粟記〕。同十四日、教如伏見城家康へ謝礼に出向〔同〕。この教如の伏見下向は、正月の祝賀ではなく祖像安置の謝礼のためとおもわれる。同二十二日京都所司代板倉勝重・加藤正次教如を訪う〔同〕。三月六日教如秀康〔家康二男〕を近江大津に迎え、翌日伏見城に訪う〔同〕。二十三日、教如秀康に謁す〔同〕。二十五日、家康に將軍宣下あり、参内するを教如見物〔同〕。二十七日、教如二条城に家康將軍任官のため訪礼〔同〕。但し当日は諸公家の参賀日で〔徳川実紀〕面謁できなかったようである。二十九日、教如家康を二条城に訪礼〔同〕。この日諸門跡が参賀した〔徳川実紀〕。またこの時、准如も下間刑部などの家臣と同時に登城し、教如の家臣と祝賀順序を争つたという〔宇野新藏覚書〕。五月二日、江戸の徳川秀忠から教如へ使者。〔粟記〕

慶長九年閏八月三十日、教如任大僧正〔「お湯殿上日記」・「大谷一流系図」〕。（准如の任大僧正は慶長十三年十二月二十七日）〔同〕。

以上の年譜によつて、教如と家康との交渉が進んだ過程はおおむね明らかである。尤もこれらの交渉の内には、事実の記録のみで内容の不詳なものがある。しかし幾つかの注目すべき事柄が明白となる。一は、関原合戦を契機とし

て、急速に両者の交渉が進捗したことである。しかし、これはすでに前述のような三河における家康の領国形成過程で結ばれた教如との関係が前提にあつたからである。そして更にこの頃までに、後述のごとく、地方における事実上の教如教団の形成はすすめられ、また家康は、天正十八年の関東六カ国への転封以後、その権力構造はすでに統一的封建権力としての性格をもち、ことに慶長三年秀吉没後は、家康の政治権力は旧豊臣五大老のなかで中心勢力をきずくこととなるが、慶長五年の教如と家康の再三の接触は、このような両者の進展の過程で、もつとも必然的なこととおこなわれたものである。なお関原合戦に、教如と准如がその向う所を異にしたのは、辻博士も認めるごとく事実と考えられ、このことは本願寺分立をより促進させる大きな一契機となつたであろう。つぎに注目すべきことは、家康の教如への寺地寄進が、関原合戦後の家康の覇権確立後におこなわれたことである。関原役後、慶長七年までに豊臣・旧族大名の除滅封は九〇名、六二二万石を越え、六十八名の一門・譜代大名が創出され、徳川氏の全国制覇の基礎が確立されたが、この時期を経て教如に寺地が寄進されたことは、辻博士がいわれた「ただ一時便宜の処置」ではなくて、家康にとつては拡大化する教如教団を政権のなかに組込む必然的処置であり、同時に教如にとつては、門末の求心的位置を確立して、時代のなかに教団を安定することを意味したのである。このように考察すれば、厩橋妙安寺の祖像を東本願寺へ移すことに家康の斡旋があつたとされることも、次章で触れるごとくあなから否定しきれないのであり、また教如が、西本願寺の准如に先だつこと四年で早くも大僧正の補任をうけているのも、同じく家康の奏請によるものと認められるのである。これに対し、准如は、慶長十三年七月駿府の家康および江戸の秀忠に謁し、漸く同年十二月末に大僧正補任をうけたのである。

以上によつて教如と家康との結合の必然性は、ほぼ明らかとおもうが、なおこれを家康の他の仏教対策の面から考

察すれば、その性格が一層明白になるとおもふ。家康の仏教対策は、いうまでもなく諸々の寺院法度として示されるものであり、それは関原合戦の翌慶長六年の高野山学侶行人対策を最初として元和元年頃で一応の完成をみるが、その主な方針は、辻博士に従えば、各宗学を奨励すること、末寺勢力を本寺に吸収して教団の中央集権を確立すること、各宗に対する朝権を剝奪して幕権下に吸収すること、の三点にあつた。^(五)したがつて、当然各宗ごとに主導権、本寺権の争いや勅許紫衣問題にみられるような旧例破壊についての諍論などが山積してくるが、この場合、宗内の紛争についてできる限り既成事実、慣例を温存して統制下に組込むのが、家康の基本方針であつた。高野山学侶対行人の紛争のごときは、行人方六百余人の流罪とその所領没収によつて落着しているが、それは元禄五年に至つての処置であり、家康の段階では、学侶行人に全寺領を両分し共存させるという両者の既成勢力を温存する方針をとつていたのである。要するに、関原合戦以後から大阪陣に至る十五年間は、急遽、家康の諸宗対策が進められる時期であり、このような一連の仏教対策との関連で本願寺の分立を考察するならば、それは、すでに教如教団の成立によつて分立状態にあつた本願寺教団の既成事実を、教如に寺地を寄進することで安定化させる目的をもつていたものというべきである。しかしこれを、新井白石が、家康の本願寺勢力二分策と評する〔高野山事略〕のは当たらないのであつて、事實は、あくまで既に教如教団の形成が促進していたことを前提として考察されなければならないのである。したがつて、以下次章において、地方末寺における教如教団の形成について考察してゆきたい。なおここで付言すれば、先の年譜にあげたような関原合戦を契機とした教如と家康との接近によつて、教如の政治的位置は安定するのであり、ここに先述の寿像下付にあらわれたごとく、この時期からその法主的活動はより積極化されたと考えられる。また、家康の寺地付与は、事実上、全本願寺教団を固定させ幕権下に掌握する性格をもつものであつた。筆者がかつて、真宗に対する法

度が漸く幕府の宗教統制の第三段階である享保期に至つて發布されることについて、それは真宗がすでに徳川初期に幕府統制のための合目的な形態を整えたことによると述べたごとく、^(五) 教如への寺地付与による全本願寺教団の安定化は、諸宗の法度に共通したさきの三基本方針を、そのまま体现することでもあつたのである。

第二章 教如教団の形成

(一) 教団形成の動向

本章においては、教如の地方末寺に対する働きかけと、地方末寺の教如への求心的志向とによつておこなわれる、教如教団形成の実態について考察してみたいとおもう。本願寺の分立が進行するのは、「永日記」が、「長子(教如)ハ隠居にて寺内に居らる。乍去門徒ともハ惣領なれハとて隠居を疊眞に思も有、又とかく寺につく門徒なれハとて当住(准如)に思付もあり、両派に分れけり、」^(六) というごとく、教如の文禄二年閏九月隠居以後においてであつた。しかし先にも触れたごとく、事實上、すでに教如の石山本願寺籠城のときに分立の動因があつたのである。天正八年の籠城について、教如が地方末寺に「抱様」の檄をだした数は、現在五十八通を数えうる。またこれに対し、顕如が教如に同調しないように抑えたものは、二十七通におよぶ。^(七) いま、この差出先を府県名で示して、各その数を配当し、更にこれに、先の教如が地方末寺に下した裏書下付・寿像下付の数を配当した一覧表をつくると、ここにかかげたごとくである。この表によると、第一に、教如が「抱様」を求めた地方のほとんど全部に顕如が抑制を求めているが、顕如の抑制の消息よりも教如の「抱様」消息の数が多くことは、教如の働きかけが積極的なことを知ることができる。第二に、教如の裏書下付のとくにCの数や寿像下付の数と、教如「抱様」消息数とを比較すると、その多い地方はほ

本願寺教団の東西分立

府 県 別	教 如 「抱様」	願如抑制	教如裏書下付			教如寿 像下付
			A	B	C	
新潟県	2					2
富山県	2	2				3
石川県	7	2		1	2	10
福井県	4	3		1	7	1
愛知県	5	1	8		3	10
岐阜県	9	4	2		8	1
滋賀県	12	2	2			10
京都市	1		1			
大阪府	4	2			2	
兵庫県		1	1			
和歌山県	5	3		1	1	
奈良県		2				
秋田県	1					
山形県	1		1		2	
山梨県	1	2				
長野県		1				
島根県			1			
広島県	1					
不詳	3	2				
	58	27	16	3	26	26

(註) A……文禄元年12月継職前
 B……文禄元年12月～同2年閏9月継職中
 C……文禄2年閏9月～慶長7年12月隠居中

も分立が求心的運動をとつて展開することを考えるならば、右のように、この表から教如籠城に分立の動因を求めて差支えないであろう。すなわち教如は、右の「抱様」消息に「予心中に一味同心の輩は可連署者也」と末寺の同盟を求め、これに対し末寺は「大阪御抱様之儀被思召立候刻、諸坊主衆一味同心之儀被申固、於後々不可有相違之通以誓詞被申上」^(五)、一味同心を誓い、また教如は、このような一味同心の末寺に対し、「たとひいつくに居住候とも子々孫々

ば一致することをする。このことは、教如の文禄二年閏九月隠居以後の教団形成が、天正八年の「抱様」を積極的にすすめた地方でおこなわれている事実がわかるのであり、また後の東本願寺教団を形成する地方ともほぼ一致するのであつて、分立が「抱様」のための教如の籠城のときに動因することを物語っている。勿論、分立が実際に進行するためには、地域差や年代差による個別的な事情があるから、その原因を一律に考えることはできないが、しかし少くとも

にいたり真俗共に見はなさすめし出し別儀あるへからす候^(五)」「兼又今度直参ニ可被召之旨(頭如から)被仰出、或者望申輩有之由候不可然候、又(頭如から)門徒を他の坊主に可被仰付之由候、縦思食寄、又者依望雖被仰付候、重而自是(教如)可申付之条可得其意事肝要候^(六)」と確約している。このような「抱様」を契機とした教如への同盟末寺の形成と、その取立てについての教如からの働きかけが、教如教団形成の直接動因となつたことは、至極當然なことであつたのである。

つぎに、右の表によつて気づくことは、教如「抱様」や頭如の抑制が、いずれも一向一揆が戦われた地方におもに集中していることである。これは、笠原一男博士がいうごとく、一揆が在地の国人的・土豪的な戦国の武士門徒との結合からなり、これら武士門徒は、頭如の石山本願寺退出後は、自らの自衛のために本願寺の戦国的立場の存続をもとめ、そのため教如を推して戦いの続行をはかつたからであり、一方教如もまた、これら武士門徒と結んで一揆を戦つてきた地方有力末寺に「抱様」の機をとばしたのである。しかし教如の退出後の国人的武士門徒は、道場経営者を除いて、大部分が本願寺教団を離脱して織豊政権や幕藩体制の家臣群となり、或は農民化したのである。勿論この在地武士と本願寺教団との結合関係は、時代差、地域差があり、また天正八年の頭如・教如の石山本願寺退出後も、なお教団は一揆を催す戦力を温存した。そして、この天正八年以後の一揆も諸種の形態があり、なかには封建知行化に抵抗するものさえあつたが、しかし所詮は、織豊期から徳川期への発展の過程で、一揆の抵抗力は解体し、領主支配権のなかに組込まれるほかはなかつたのである。^(七)

教如の教団形成は、このような本願寺教団の変化の過程ですすめられた。すなわち、天正八年の教如「抱様」に同調した末寺は、そのこの本願寺自体の織豊政権への従属と、その地域の大名領主権確立の過程で、究極的には純寺院

化を余儀なくされ、自らの去就を明確にするため、教如への求心的結合を必要とするのであり、また教如においても、これらの末寺の統合は、本願寺教団の安定化の上から、当然実現されるべき事柄であつた。さきに、石山本願寺退出後雜質に退いた教如が、その諸方を廻り教団復興をはかつたことに触れたが、それはこのような、「抱様」に同調して頭如の本願寺を離れた末寺の求心的結合にこたえるための行脚であつたといえよう。そして、このような教如への求心的結合は、なお一層活潑化し、教如の法主的活動の活潑化と相俟つて、事実上の本願寺分立が成立するのである。しかし、この教如と末寺との結合関係においても地域差があり、それはできるだけ具体的にその個別的な性格を分析することによつて、その関係が明白にされるべきであり、それを前提として分立の全体的性格の結論が求められねばならない。しかし乍ら、この方面の研究は未だ全く空白状態であり、史料整理も殆んど行われていない。したがつて、なお局部的考察にならざるをえないのではあるが、筆者の管見によれば、教如教団の形成は、(一)教如と地方末寺との直接的な結合と、(二)地方末寺の講形成とを原則的とし、或はそれらの複合形態をとつて進行するのであつて、以下、これらの事情について少しく個別的に考察してみよう。

(二) 地域教団の形成

近江 近江における教如教団の形成については、とくに江北教団と江西の慈敬寺の場合について考察してみたい。

江北(坂田郡・東浅井郡・伊香郡)の真宗教団は、本願寺第三世覚如の頃から開発され、第十世証如の頃には、福田寺(坂田郡長沢)・福勝寺(同郡成亥)・誓願寺(同郡箕浦)・順慶寺(同郡上坂)・金光寺(同郡十里)・淨願寺(同郡榎木)・誓願寺(東浅井郡内保)・称名寺(同郡尊勝寺)・真宗寺(同郡益田)・中道場(坂田郡上坂授法寺)の十カ寺を中心とした連合体をつ

くり、さらに元龜年間に至ると「十カ寺衆」としての組織を形成し、下部に「下坊主・ひらの衆」を擁する一揆的戰鬥体を構成することとなつた。そして、在地の戦国大名浅井長政と結んで信長に抗し、元龜二年には信長配下の本江城の堀秀村を攻めたが、天正元年浅井氏壊滅後も、なお十カ寺衆の一揆力は持続し、石山本願寺の外郭的な戰鬥力を形成したのである。そしてこの戰鬥力は、ひとえに、十カ寺衆や他の有力末寺自体の地侍名主的性格、あるいは、それらの末寺と在地土豪との結合によつたのである。^(三) 教如は、天正八年の大坂「抱様」について、このような江北教団につよく依頼したのであつて、再三教如への一味同心を申送つてゐるのである。^(四) これに対し、頭如もまた、大坂退城の止むなき事情を報じ、教如への同調を抑制したのである。^(五) しかし、天正十年信長没後は、すでに天正元年に長浜城を構築して江北に入部してゐた秀吉の完全な支配下に入り、十カ寺衆はいずれも地侍名主的性格を払拭して近世的な純寺院化の道を歩むのである。^(六)

しかし、天正八年の大坂「抱様」を契機として、十カ寺衆の湯次（内保）誓願寺などが頭如にしたがつた以外、江北教団の大部分は教如へ同調を示し、鉄砲衆を石山本願寺へ送つて協力したが、また教如の大坂退出後も、ひたすら教如との結合を密接にしていつた。そのため、江北教団と頭如との間には隔意を生ずることとなつたが、教如は、江北の鉄砲衆や惣坊主衆・門徒衆に対し、頭如から如何様の折檻があつても決して見放すことなく取立てることを、安堵確約してゐる。^(七) また、その後、十カ寺衆のうち最有力末寺であつた福田寺は、詳細はわからないが頭如から何事かによつて不興をうけ、配下末寺と共に頭如に対し「内輪に恣ま之存分」を働こうとしたが、この時も教如は、福田寺の「向後の様躰」について引受ける旨を申送つてゐる。^(八) 教如が大坂「抱様」のため頭如の義絶をうけ、天正十年六月和睦するまでの間諸方を廻り、江北板並の辺にも入つたらしいことについては先に触れたが、教如と江北教団との結び

つきは、このような直接間接の關係を通じて強固なものとなつたのである。一方また、江北教団が天正十年後秀吉の支配下に入ると、教如は江北教団を通じて「万端秀吉へ可然之様御取成憑申候」^(三)と依頼するのである。

かくして、教如と江北教団はすでに天正八年以来、密接な結合を示すのであるが、この關係はそのまま文禄二年閏九月教如隠居後にも継続するものであつた。教如がとくに江北教団に留意したことは、さきに掲げた寿像下付や隠居中の裏書下付に江北末寺へのものが多いことから推察しうるが、また今日、江北地方に、すでに天正十三年筆の「一枚起請文」を始め、多数の教如真蹟が残存^(三)していることでもわかるのであり、これら真蹟は、教如からこの地方の末寺門徒に付与されたものとおもわれるのである。このような教如と江北教団との結合は、勿論一揆時代のままの継続ではなくて、とくに秀吉による領国經營の支配權に組込まれて純寺院化してゆく教団の変容の結果によるものであつた。すなわち、天正八年の段階で頭如と隔意を生じた江北教団は、その後の教団変容によつて、その真宗教団としての寺院集団を統轄するにたる中央の統卒者を必要とするのであつて、ここに教如への求心的結合が益々強められたのであり、一方教如もまた、これに應えて法主的活動を一層活潑化していつたのである。そして、江北教団の求心的結合が具体化したのが十四日講の形成であり、さらに長浜や五村（東浅井郡虎姫町）における教如の御坊（別院）建立であつた。

十四日講の成立は慶長元年とされる^(三)。すなわち、十カ寺衆を中心とする江北教団は、天正十八年以後一時廢城となつていた長浜旧城内に、慶長元年その集会所（總坊）を移し、これを機會に十四日講を結んだとされるが、この講結合の中心をなすのは「季秋十四日」付で江北教団に宗義を諭した教如の消息であつた^(三)。この長浜城内の總坊は長浜御堂と称されたが、まもなく教如はこの長浜御堂を御坊に取立てることをはかつた。それは、

「教如様御代に、江州北部に長浜御末寺御取立有度由、思召被立候而、同長沢、当福田寺（十四世默然カ）^{（祖父）}ためにはおほち、田法（十二世、伝法院正芸）召被上、御談合被成候、此儀に付諸事頼思召候間、肝を煮候てと御意被成候故に、田法色々才覚仕、取立申、于今御坊御座候事」^{（五）}

というごとく、十カ寺衆の有力末寺福田寺の奔走によるものであつた。この御坊取立は、寺伝にいうごとくほぼ慶長七年前後とおもわれ、それは、翌八年十月に教如が長浜へ下向している事実からも、充分なつとくできるのである。この長浜御堂は、関原合戦後この地が幕府直轄領となりさらに慶長十一年内藤信成が長浜城に入部して再築することとなるので、同年寺基を現地（長浜市元浜町）に移すが、教如はこの時も改めて江北教団に「馳走」と信心とを勧めていたのである。^{（六）}そして、この頃には長浜御堂は大通寺とよばれるが、寛永十六年には連枝宣澄（靈瑞院。教如ノ子東本願寺第十三世宣如ノ三男）を迎えて、名実共に御坊の形態を整え、江北教団を統轄するのである。

なおまた江北では、長浜御坊の外に、五村（東浅井郡虎姫町）にも教如により御坊が建立された。諸種の記録によつて五村御坊建立の事情を推察すると、それは慶長七―八年の交とおもわれる。すなわち、江北教団のなかで五村近辺の末寺三十二カ寺がとくに結束し、在地の郷士大村刑部の支持を得て、教如へ御坊建立を慫慂したのに始まるという。大村刑部は幕府の代官日下善介の了解をえて、五村の支配地の内一町五反余を御坊寺地に寄せたが、この地方が代官支配となるのは関原合戦以後から慶長十一年内藤信成の長浜入部までの間であるから、右の御坊建立を慶長七年ないし八年とする記録は、おおむね當つてゐる。この五村御坊の建立には、大村刑部以外に多くの在地有力郷民の肝煎があつたが、とりわけ大村刑部の力があづかつて大きかつたことは、教如が此頃六月二十三日付の大村刑部宛の書状で、「其地坊舎柱立近々可有之条、大慶不過之候、就中長々勤勞之顯感悦に存候、且又坊舎之地面目録等令披見候、先祖

之不願家督候て厚懇之至不淺覺候、云々^(五)と申送つてゐることで、明白である。しかし、五村御坊建立の動機については、右の程度以上に詳細を知りえないのであるが、恐らくそれは、東本願寺開創直前の時期にあつて、教団勢力や北陸・東海・近畿への接点を扼する地理的位置などからいつて、江北教団に長浜御坊のみでは不充分とする、教如の教団経営から出ずるものとおもわれるのである。

つぎに江北教団と教如との関係で注目すべきことは、江北にすでに存した局地的な寺院結合体が教如方についたり、或は新しく教如に結びつく局地的寺院結合が生れたりしていることである。さきの長浜・五村両御坊が多分に教如側からの働きかけによると考えられるのに対し、これらは末寺側からの求心的活動として現れるもので、いずれも教如の東本願寺建立前に、すでに十カ寺衆に統轄される江北教団のなかの小教団として、形成されているのである。その主要なものの実例としては、下寄組と湯次方との各末寺組織があるが、前者は既存の末寺結合が教如についたものであり、後者は大阪「抱様」を契機に新しく教如方の末寺組織として生まれたものである。最初に下寄組についてであるが、これは現在、坂田郡下の覚応寺・善照寺・浄願寺・誓伝寺・徳明寺・西空寺と東浅井郡下の念相寺・真願寺・安勝寺・西照寺・宗念寺・照明寺の十二カ寺の組織をよんでいる。しかし、この寺院組は、徳川中期に東本願寺第十七世真如から下付した宗義宣述の消息の宛所に「江州北郡下寄十二日講十二カ寺坊主中門徒中^(六)」とあるので、この頃から十二日講を称したことがわかるが、寺院数やその構成は現在と異ならないことが推測される。そして、この寺院構成はおそらく近世初期においても同様であつたであろう。ところで、この下寄組の起源については詳細を欠くが、組中で共有している本願寺歴代法主の裏書下付に、実如裏書の宗祖絵像・蓮如絵像や、証如の「享祿□年六月廿六日、江州□郡下寄□」と裏書のある実如絵像があり、また証如は寿像を下付している^(七)。これによれば、少くとも第十

代証如時代には下寄組が形成され、それは当然講組織をもつていたことが推測される。したがって先の十二日講は、この講組織を近世中期に名称化したものであろう。さらにまた、証如の「天文日記」によれば、「江州下寄衆」として西空・慶正・正了・孫兵衛入道などが再三当番のため石山本願寺に上山していることがわかる。^(三)すなわちこれから推せば、下寄衆は証如時代にはまだ寺号をもたない道場経営者の組織で、それが講により結合していたことをしるのである。このような下寄組の講結合は、そのまま願如時代にも継承され、さらに教如と江北教団との結合が生じるに及んで、下寄組も教如方へ向うこととなつたのである。しかし、この間の経緯を詳しくすることはできないが、それは、教如がなお隠居中の慶長六年六月に裏書をして下寄組に下付した願如絵像が存すること^(四)で、あきらかである。そして、下寄組の各寺は、おおむね教如の配下に入つてのち、ないしさらにその後、道場形態から各寺号を称して寺院形態へと発展したのである。^(五)

つぎに湯次方と教如との結合関係について考察してみよう。徳川中期の記録によれば、湯次方とは、浅井郡の本誓寺など十四カ寺・一道場・一同行村と、坂田郡の蓮沢寺など四カ寺と、美濃広瀬村の妙輪寺など二カ寺の、計二十二所の組織である。^(六)これら二十一寺と一所は、もと十カ寺衆の一である湯次(ゆすぎ、現内保)誓願寺の末寺ないし支配下にあり、誓願寺はなお外にも坂田郡の本授寺・光願寺などの末寺をもつていた。しかるに天正八年の石山本願寺退出のとき、誓願寺は前述のごとく願如に従つて雑賀におもむき、^(七)右の二十一末寺などは教如の「抱様」に同調して、誓願寺と対立することとなつた。のち、慶長五年関原合戦に教如が関東の家康を見舞い、帰洛の途次、これら教如に同調した誓願寺の末寺は、湯次方として結束し、とくにその路次の安全に尽力したという。^(八)その結果翌年、教如から湯次方へ寿像を下付されたが、それは先の寿像下付一覧表の近江(一)として、湯次方の内の一寺に現存している。かく

して、湯次方は教如隠居中に、全く教如方の局地的教団としての地歩を固めたのである。そしてさらに教如の東本願寺建立後は、これら末寺は完全に誓願寺から脱して、「湯次方直参」として、東本願寺直末となり、江北教団中の地区教団として、教如に直結したのである。なお教如は、その湯次方の筆頭格の本誓寺に、再び寿像を下付して、密接化しているのである（寿像下付一覽表の近江内）。

以上が江北教団と教如との結合関係の主要なものであるが、つぎに、江西の慈敬寺の場合について考察してみよう。慈敬寺は、蓮如が滋賀郡堅田新在家に一字を建立したのに始まるとされ、ついで蓮如第十三子顕証寺蓮淳も居住し、さらに蓮如第二十二子兼照が継ぐに及んで、寺基が固まつたようである。その後、元亀元年の江西における浅井・朝倉と信長軍との対抗には、慈敬寺は前者に属して三浦門徒などを統率して信長軍と戦った。そして、この功で顕如から「其表毎度働無比類次第感入計候……将亦院家ニ免し候了」と、院家に取立てられている。なおこのとき、慈敬寺は一度堅田を退いたが、まもなく還住して、江西の地歩を固めている。しかるに、天正八年の石山本願寺「抱様」に際しては、慈敬寺五世証智（佐増）は教如に組し、そのため、教行寺証誓・毫撰寺善海などと共に顕如の勘氣をうけ、門徒を追放され、堅田を離れるにいたつた。これに対し、教如は、「此たひ一味同心之覺悟無比類候、たとひいつくに住住候とも子々孫々にいたり真俗共に見はなさめし出し別儀あるへからず候」と、教如が継職して後、取立てることを保証している。また証智の妹杉向の逝去に際しても、教如は、「杉向往生之由驚入候……御身上御詫言之儀少茂無油断候、可心安候」と、その死をいたみ且つ、顕如への証智の執成しを確約しているのである。

そのまもなく、証智は高島郡に転出し、舟木村に寺基を固めた。そして、同郡中の鹿ヶ瀬・畑・鳴の祐伝・大田・岡・葦園の即得寺などの近隣村落の坊主と共に教如に属し、また直接慈敬寺への教如の下向をうけている。これ

ら村落の坊主達は、いずれも、さきの元亀元年の信長との江西の戦に慈敬寺の統卒下に戦つたものであろうし、また石山本願寺「抱様」にも、慈敬寺と行動を共にしたものとおもわれる。しかし証智は、一面、長子顯智（佐賢）を西本願寺派へ向け、顯如以来の勘気を解かれる工作もしたようであり、このため慈敬寺は、証智の後、兄弟で東西に分立することとなつた。すなわち、顯智の置文や誓詞によれば、

(一)「先慈敬寺（証智）本願寺先住寺（顯如）以来、不相届始末ニ付、終ニ本寺江無出仕ニ付、当慈敬寺我等顯智、条々令其届、四年、已前本寺へ理申出仕、……去春親共相果申候、然処我等兄弟中末子教導と申者、親之ゆつ里として我等方へ不及一言之届、仏法領之道具其外何も裁判之為仰候、本寺より被聞付弥不相届次第候条……具被分聞召被仰付候者、忝可存候事、」（慶長三年七月、顯智置文）

(二)「抑当御所様（准如）之御事……殊先師顯如様御譲渡之状御座候ニ付而、先年証智も得其意出仕可申由之処、何かと致遅ニ申候、兼而者又教如様儀のかれかたさ（くさ）彼是其分ニ相果申候き、就中我等（顯智）事も教如様へ御届方々ニ此頃迄御理をも不申上候き、……教如様御様御本寺同然之御裁判……就夫慈敬寺を以て興門主様（興正寺顯尊—教如弟）迄御内証伺申候へ者、在別儀間敷之条上洛可申由……此上者教如様御事馳走申同一味被申衆共入魂申義、在御座間敷候……」（^{五七}）

などとなる。これによれば、証智が「御本寺同然之御裁判」を示す教如につく一面、また准如方への配意も怠らず、その長子顯智は慶長三年から「四年已前」、すなわち文禄四年に教如弟の興門主顯尊を介して准如方へつき、さらに慶長三年二月証智が没すると、顯智の弟教導（智興）は舟木慈敬寺を継いで、東本願寺に属したことがわかるのである。なお、准如方についた顯智は、同じく高島郡清冷寺村（又、大物村とも云）に慈敬寺を別立した。以上の慈敬寺分立は、すべて教如の東本願寺建立以前におこなわれたのであり、かくして江西においても、すでに早く有力末寺を中心とし

た教如教団が成立していたのである。

三河 三河における教如教団の形成については、その概略について先章で触れた。すなわち、三河の真宗教団では一家衆本宗寺と上宮寺・勝鬘寺・本証寺の三大坊が対立したが、共に永禄六年に家康と戦つて追われ、その後いづれも天正十一年から十三年の間に帰還を許されたが、とくに同十五年の教如の三河下向以後、三カ寺の教如への傾斜が急速にすすめられたのである。この教如下向は、家康と三河教団との調整を目的としたが、このときの家康への礼錢齎出や教如宿所のことなどについて、再び本宗寺と三カ寺とは対立を深めたのであつた。

ところで、天正八年の石山本願寺退城に際し、顯如は九月二十三日三州宛に教如の「抱様」に不同意であることを表明しているが（「本願寺文書」）、また教如も九月二十日本証寺へ宛てて、「今度退散候事不及力依仕合如此成行事誠殘多次第候」と大阪退城を報じ、併せて志の銀子到来を謝している。⁽⁵⁾これによれば、本証寺をはじめ三カ寺などの三河教団は、教如の大阪「抱様」に同調したことが推察される。さきにみた天正十五年教如の上宮寺下向以後の三カ寺の教如への傾斜は、実はすでにこのような前提があつたのであつたのである。なお、天正八年の段階では、三カ寺などは在地を追放されてお⁽¹⁰⁰⁾り、本証寺のごときは賀茂郡に逃れたとい⁽⁵⁾う。しかし、永禄一揆を戦つた三カ寺の各百カ寺に近い末道場との結合はその後⁽¹⁰⁰⁾も維持され、それら村落道場と門徒農民との結びつきは、その頂点にたつ三カ寺を通じて、石山本願寺ないし教如の「抱様」を支援するに充分な財力を提供したのである。かくして、教如と三カ寺教団との結合が促進するが、教如は、天正十七年上宮寺尊祐に対し、同寺の妙秀妙祐の絵像を下付し裏書しているのであつて、これは、天正十五年の上宮寺下向以後、とくに教如と三カ寺教団とが密着したことを推察させる有力な資料である。そして、このような経過をたどつて、慶長二年には、三カ寺教団はあげて教如方につくことを盟約するので

ある。その上宮寺に存する誓詞の全文を示すと、

「今度三ヶ寺様於新門様（教如）御出仕被成候ニ付而、各按捺殿（下間頼竜）より如書札、三ヶ寺様如御誂可仕候、門徒衆一人も福嶋へ参詣候へ、生死一大事之時道師仕有ましく候、為其如件、

八月廿四日

祐念（花押）・尊教（同）・秀了（同）・誓忍（同）・祐明（同）・尊乗（同）・祐心（同）・慶順（同）・祐教（同）・順光（同）・教円（同）・秀専（同）・順教（同）・祐西（同）・祐賢（同）・祐順（同）

進上 三浦六衛門殿御中」

とある。すなわち上宮寺末道場坊主の主なものが、上宮寺の家司三浦氏にあてて出した誓詞であるが、三カ寺と対立した本宗寺は准如方について額田郡福島に居り、その福島に参詣する配下の門徒の葬儀の導師をつとめないことを確約したもので、三カ寺の帰趨のままにすべて教如方につくことを、本寺に対して一味同心したのである。ここに、三カ寺を頂点とした三河教団の大集団は、あがて教如へ帰することとなつたが、教如は、この盟約の成つた年に上宮寺へ裏書下付を行い、つづいて数年後の関原合戦の後に、これら三カ寺末の三河・尾張の道場坊主に、教多くの寿像を下付しつづけて密接な關係を保つていつたことは、先章の寿像下付裏書一覽表に示たとおりである。なお、教如は、先述のごとく烏丸七条に寺基確立後、慶長八年一月に上野厩橋妙安寺から宗祖木像を迎えて安置するが、この祖像動座の斡旋をしたのは厩橋城主酒井重忠であり、重忠はもと先祖以来の上宮寺の門徒であり、厩橋に移封した者であつた。

かくして、三カ寺を中心とする三河教団は、教如の東本願寺建立前において、すでに有力な教如教団を形成していたのである。このように三河に早くから教如教団が形成された理由には、何よりもまず永禄一揆後の教団構造の変質

による点が大きいであろう。すなわち、永禄七年二月の一揆敗北後、従来の本宗寺・三カ寺などに結びついた在地武士門徒はいずれも家康の被官化してその家臣群に組み込まれ、また末寺坊主からも還俗して同じく被官化する者もあらわれるに及び、教団は寺院と門徒農民との結合を中心の紐帯とした構造へと変り、その門徒農民は更に、家康と在地武士との主従関係形成力により、その支配下に吸収されることとなるのである。⁽¹⁰⁸⁾しかも、家康権力による本宗寺・

三カ寺以下中心寺院の追放と還住とは、三河教団全体が家康の政治権力に服し、その領国支配の統制下におさめられることを意味したのである。ここに至つて、その中心寺院はより強力な本願寺との結合による教団再編のための求心的活動が必要となることとなるが、この場合、本宗寺と三カ寺との旧来の対立は、その求心的活動の対象を互に異にすることとなつたのである。そして、三カ寺教団が教如につくのは、先述のような大阪「抱様」や教如の上宮寺下向を契機としているが、さらに、これら中心寺院の還住に際し、それを家康に斡旋した石川日向守家成の母「めうしゆん」と教如との関係が考えられる。「めうしゆん」はまた家康の伯母に当り家康を養育したが、石川一族は三カ寺のうちの本証寺の有力門徒であり、彼女もまた真宗信者であつた。⁽¹⁰⁹⁾この「めうしゆん」は、教如が「いつもと申なから御心さしのほと申つくしかたく存候」と申遣るほどに教如との親交があり、このような本証寺有力門徒と教如との関係が、また三カ寺を教如方へむかわせる一契機ともなつたことであろう。

北 陸 つぎに加賀をはじめ、越前・越中・越後・能登などの北陸における教如教団の形成について瞥見してみよう。加賀においては、長享二年一向一揆が守護富樫政親を自害させてから、本願寺領国化がすすめられるが、越前では、永正三年超勝寺・本覚寺などの大坊は越中・加賀・能登などの一揆の来援を得て朝倉教景と戦い、破れて加賀に敗走し、超勝寺・本覚寺は同国能美郡・江沼郡に牢人した。このため、加賀では、北陸に多くの門末を擁する超・本

両寺と、本願寺の一家衆寺院として加賀教団に支配力をもつ本泉寺・松岡寺・光教寺の三カ寺とは対立し、享祿四年には、ついに加賀教団は内部分裂をおこす。いわゆる大小一揆がそれであるが、このとき大一揆とよばれる三カ寺は越前朝倉の来援や能登・越中の武家勢力の進出を迎え、小一揆側の超・本両寺は白山々麓山内庄の鈴木右京進など山内衆と結び、さらに本願寺の支援により下間頼盛・頼秀の軍を迎えて戦い、結局、三カ寺側は敗北を喫して結末をつける。この場合、両者と在地勢力との結合関係について、三カ寺対超・本両寺の対立に、国衆対在所衆(中小名主層)の対立関係が介在するの、守護勢力対国衆の対立関係が介在するの、(二)については論議が重ねられているが、少なくともこの内紛の結果、加賀教団では一家衆三カ寺の勢力が後退し、教団の支配形態が超勝寺方とさらにそれを推す本願寺の支配へと移行したことは事実である。そのご金沢においては、天文十五年、加賀教団に対する統制機関として御坊が建立され、本願寺から派遣された堂衆が宗務を担当することとなつたが、この御坊建立は、従来の一家衆を中心とする教団統制にかわる、本願寺の直接統轄機関の設立を意味し、教団支配機構の変質を物語るものであつた。

その後、弘治元年、越前の朝倉氏は加賀の江沼郡を侵して超勝寺と争つたが、翌年朝倉軍は越前に退き、また超勝寺も故国越前に帰り、さらに元龜二年になると、朝倉義景の女三位殿を教如の室に迎え、本願寺と朝倉氏は和約し、これを機に長年の加賀・越前の闘争も終結した。しかるに、天正元年、かねて越前の朝倉と近江の浅井の連合軍に対立していた信長は、八月近江小谷城の浅井久政・長政を滅し、さらに越前に攻め入つて義景を自刃させ、朝倉氏は滅亡した。越前の本願寺教団は翌年、加賀一揆の来援を得て織田方の部将や溝江長逸などを討ち、本願寺から下間頼照が下向して越前を支配したが、直ちに信長は翌天正三年八月越前を平定し、頼照も殺され、九月には信長配下の前田利

家などが府中(武生)に入り、柴田勝家は北莊(福井)に入り、越前は信長権力に吸収された。この場合、朝倉滅亡後の天正二年からの一揆の構成は、越前の西光寺・専修寺・照護寺などの一家衆が主戦派にたち、これに対し軍費・労役を負担する坊主衆・門徒衆は離反脱落し、そのため信長軍の再征服を容易にしたものであった。^(二二) ついで信長軍は加賀に侵入し、江沼・能美の南二郡を手中に収めた。ただし、両郡中の山間後進地帯の山内庄は、鈴木出羽守に率いられて、依然一揆の一主力となり、信長方に対抗した。それは、天正六年顕如から「山内之儀者、とりわき毎度粉骨難有候、弥可然様たのみ入之外無他候」^(二三)と特に依頼するほどの抵抗力をもつものであった。

北陸の真宗教団では、このような過程を経て、天正八年の大阪本願寺と信長との講和をむかえた。信長は三月十七日の講和起請文のなかに、「加州二郡大阪退城以後於無如在者、可返付事」^(二四)の一条を入れ、さきに天正三年攻略した加賀の能美・江沼両郡の返還を約した。顕如はこれを四月一日、山内惣中・鈴木出羽守にあて、「能美・江沼両郡如前々可返付之由候、当分者箭留申候、就中今度柴田乱入、至金沢辺放火由候、縦一旦其分ニ候共可申屈候」^(二五)と報じた。しかし事實は、右の文中にもいうごとく、信長配下の柴田勝家が加賀に乱入して、二郡の返付はおろか、金沢御坊を焼き、さらに他の石川・河北二郡も攻略し、つづいて越中にまで侵入平定するありさまであった。顕如は信長との講和に際し、教如の大阪「抱様」に同意しないよう、北陸の教団に対し、四月十五日越中坊主衆門徒衆と越中河上郡五ヶ山惣門徒中へ、同十六日能登本誓寺へ、五月二十九日越前常楽寺へ、六月二十一日越前へ、八月三日加賀四郡へ、同十六日再び越前へ、それぞれ通達した。これに対し、教如も「抱様」への協力をもとめ、三月二十八日越中善徳寺へ、閏三月二十五日越前専修寺門徒栄清へ、閏三月二十九日越前真宗寺門徒中へ、四月二日加賀四郡へ、同三日能登羽咋郡惣中へ、同四日能登鳳至郡惣中へ、五月十四日能登サキ山十八日講衆中へ、同日越後浄興寺へ、同十五日越中

惣坊主衆中門徒衆中へ、六月七日越後諸坊主衆同門徒中へ、それぞれ檄をとばした。⁽¹¹⁸⁾ 顕如がこの「抱様」に關し教如を義絶したことは先に述べたが、教如は自己に組した家臣寺内織部・井上善五郎の二人を八月頃、山内庄・鈴木出羽守へ下し、顕如から「狼藉之働前代未聞」といわれるような、教如「抱様」への同調を強力にすすめさせた。⁽¹¹⁹⁾ 山内衆・鈴木出羽守もまた、これにこたえて教如に組し、信長方に抵抗した。これに呼応し、加賀の武士門徒は越後の上杉景勝と結び、教如もまた景勝に接近し、越中五カ山に逃げた瑞泉寺・専光寺・専修寺なども抗戦をつづけた。しかし、天正十年、かねてからの山内庄内における牛首組対尾添等三組の内紛と、柴田勝家の山内衆攻撃により、鈴木出羽守は殺され山内庄は壊滅し、一向一揆はついに解体するのである。とわいえ、大阪の石山本願寺講和以後において、山内衆など北陸の武士門徒や瑞泉寺・専光寺などの有力寺院が教如について戦つたことは、のちに北陸で教如教団が形成されるための大きな足がかりをなすものであつた。

その後、教如は自から北陸に下向し、北陸教団の収攬をはかり、且つ上杉景勝との提携をふかめた。越後の「本誓寺由緒鑑」⁽¹²⁰⁾ には次の教如消息を収めている。

「両度之芳翰、殊更以神文可令下国之由、本懷不過之候、其以前既雖充足候、路次不輒、途中ニイ候之所、天下不慮出来候、然者為叡慮家中合体之儀被仰出満足之至ニ候、先々貴国属御存分段、大慶此事ニ候、今般馳走之儀門下之族へ申下候、弥向後万端憑存候、（以下略）

十月廿二日

光 寿（教如）

上杉彈正少弼（景勝）殿」

「霜台（上杉景勝）種々深切之儀更ニ難忘却候、併御取成故候、去春既ニ雖下国候、路次一向不通付而、途中塾居候処、天下不本誓寺教団の東西分立

慮出来候、然者為禁裏被仰出家中入昵候（以下略）

十月廿二日

光 寿

上条殿」

共に同内容のもので、教如（光寿）から上杉景勝とその臣上条にあてたものである。文中の「天下不慮出来」は天正十年六月の信長滅亡を示し、「為叡慮家中合体」とは同年八月勅使を迎えて成つた顯如・教如の和睦のことで、したがつてこの文書は天正十年十月のものであり、これによれば、教如は「去春」すなわち同九年春には北陸へ下国したことがわかるのである。この教如下国の主目的の一は、かねてから越後の本誓寺を通じて聯繫をもとめていた、景勝への接近を実現するためであつた。更には、景勝宛の文中に「馳走儀門下之族へ申下」というごとく、越後の末寺と景勝との聯合をはかるためであつた。ところで、越中善徳寺文書の景勝の書状には

「（前略）仍而先達柴田山内相動候処、及防戦数千討捕之由心地好候、……然者門跡至于五ヶ山辺御下向之由候、幸之儀候間、任兼日之首尾、國中相催可被揚放火事肝要候、……越中能州其國御門徒中於発向者、当国差合今般凶徒之根切可成之条（以下略）

卯月八日

景勝（花押）

善徳寺」

とあり、柴田勝家の山内衆攻撃の防戦を称え、且つ越中・能登一揆の烽起を求めているが、文中「門跡」の五カ山下向については、「善徳寺由緒略書」に「天正十年三月下旬、信浄院教如上人之事按察法橋・富井佐渡守・豊前浄喜寺等被為召れ当寺江御潜入十有余日御滞在有之候」と伝えている。（二二）これは先の教如の景勝・上条宛書状の内容と比較して、天正九年春のこととしなければならないが、教如の五カ山潜伏は、先の教如書状にいう「途中塾居」を指す事実として

信用してよいであろう。そしてこのように、北陸教団がなお景勝と結び信長に抵抗をこころみる天正九年の段階で、大阪退出後の教如が直接その現地に歩をすすめたことは、のちに北陸教団が教如に投ずる最も強い動機となつたと考えられる。しかし、教如や北陸教団が、景勝と組んで信長に抗しようとする動向は、天正十一年、景勝が秀吉に通じるに及び、全く挫折するのである。

さて、先述のごとく天正三年に越前府中を領した前田利家は、同九年さらに能登を領し、さらに信長没後の同十一年には越前北莊の柴田勝家に対する秀吉の攻略に組して、加賀の石川・河北二郡を得て、金沢の尾山城に入つた。ところで、この頃になると、たとえば能登の妙嚴寺が、従来の一揆的な力を残存しつつも、新しく村役人的な扶持人として前田氏の支配権に吸収されていく⁽¹⁰⁾、北陸教団はそれぞれ大名の領国支配に組込まれる段階に至るとみてよい。そこで、北陸における前田氏の支配権が伸長するこの段階において、顯如は、とくに前田氏に接近し、その領国内の教団の保持をはかつたものと考えられる。すなわち、天正十二年十月二十五日、下間頼廉が能登鳳至郡の坊主衆中惣門徒中にあて、

「前田殿、連々對御門跡様（顯如）別而御入魂之儀候間、各得其意無疏略相応之儀可令馳走事簡要候、自然一揆等之儀、自何方申催儀雖在之、……左様之儀、一切不可令同心候、万一違背候族於在之者、可被召放御門徒候旨、……」⁽¹¹⁾

といい、前田氏と門跡顯如との結合を説いて、郡中全門末が前田氏に服することを求めていることがそれである。この顯如と前田氏との接近は、同十年頃まで景勝と組んで北陸教団を信長への抵抗にむかわせていた教如の前田氏に對する關係を、却つて疎外することになつたとおもわれ、これがやがて、加賀で教如教団の形成が具体化するとき、前田氏からの掣肘となつてあらわれるのである。ところで、前田利家は天正十三年になると、富山の佐々成政を討つ

ための秀吉の越中征伐に加わり、越中四郡中三郡までを加増されるが、この戦乱に際し、教如は同年閏八月再び北陸に下向している。それについて「貝塚御座所日記」には

「閏八朔日、新門様（教如）北国御陣御見廻トシテ俄御下向、越前サカヒ大聖寺ニテ秀吉へ御礼御申アリテ、ソレヨリ越前加賀両国御一見、御門徒馳走不及申、ソレモ秀吉より御異見ナル故也」
（意）（三三）

という。すなわち、秀吉の命で越前・加賀の教団を鎮撫し、秀吉越中征伐の背後の安定をはかるための下向であつたのである。この頃の北陸は、越前の柴田勝家は秀吉に討たれてすでになく、越後の上杉も秀吉に組し、能登・加賀半国・越前府中などは前田に属して、秀吉権力の厭倒的な支配下におかれており、さらに北陸教団も秀吉配下の大名権力の統撰に吸収されてゆくから、教如とても、もはや豊臣政権に屈する外なかつたのである。それにしても、かく教如の下向を秀吉が要請しなければならなかつたのは、北陸教団がすでにこの頃、教如と密着していたことを物語るものにはかならない。

さて前田利家は、文禄三年七月、さきに勝家の軍により焼かれた金沢御坊に禁制を与えて再興させている。（三三）この御坊再興が、頭如没後に一端本願寺を継職した教如の、文禄二年閏九月隠居するその翌年に、前田氏によりおこなわれたことは意味のあるところとおもう。すなわち、先に述べたごとく、利家はかつて頭如と好くて教如と隔意の間柄であり、したがって准如が教如に代つて本願寺を継職するに及んで、御坊を准如の「本願寺末寺」（三四）として再興を認めたものであろう。ところで、慶長二年七月に下ると、加賀の前田領内での本願寺教団で、准如に対する離反事件が起つている。この事件の原因や経緯については詳細を欠くが、その事件とは、同年七月十二日、領内富山町や本町・松任町の門徒町人が、前田対馬守・浅井左馬助に宛て、

「今度当町中儀、被仰出候ことく、対本願寺、毛頭別儀を存ましく候、若一人成共、本寺を本寺といたさず、逆意をかまへ候者御座候へ、町中として可申上候、此旨利長様（前田利家の長子）へ可然様ニ以御心得被仰上候て可被下候（以下略）」

と連判状を出し、また同月二十日には領内の町人、才田屋新右衛門尉・いしや清左衛門尉など五名が、本願寺の下間少式法橋にあて、

「乍恐申上候、於当地、そうけきと申なから此五人之者対御本寺、逆意をかまへ、別而わうりやういたし候故、御成敗ニ相極候処ニ、奉談之通種々御託言申上候ニ付て、以御慈悲御赦免有難存候、自今已後御本寺を相守、対当御門主准如様へ毛頭別心之覚悟御座有ましく候、若此旨違背仕候者、於今生、利長様ノ御罰をかうふり、一類可預御成敗候、（以下略）」

と誓詞を出している事件である。この事件は、七月九日、前田利家から本願寺にあて、

「貴札之趣具令拝見候、仍而御末寺頃致不参付而、為御改使下間少式法橋被差下候、委細得其意存候、雖然仏法之批判難計候条、如何様ニも少式法橋次第候、若違背之輩於御座候者、急度可申付候、（以下略）」

と報じた事件や、さらに同年十月七日、前田利長から領内の本願寺教団に対し、

「一、本願寺末寺門下之儀、任（秀吉の）御上意之旨、当家督門跡（准如）へ可致馳走事、一、当門跡江構逆意末寺之坊主衆、^{（三三）}國中相私、寺々令放火上者、見あひに可令成敗事、一、当本願寺へ無別儀之末寺之坊主衆へ、其門下々々如前々可令馳走事、」

と高札をかかげた事件とも関聯があると考えられる。そして、いずれも准如の本願寺に対し離反を企てた事件であるから、その裏面には教如教団形成の問題が介在しているものと推察する。すなわち、准如の本願寺と結んで金沢御坊を復興し、それによつて領内の教団統轄を意図する前田氏の工作に対し、この頃、すでに教如と密着していた加賀教団の末寺門下衆は、教如をたてて分立をはかつたのであり、そのため新たに教如方の御坊建立を企てたものと考えら

れるのである。そして、その財源は才田屋など五名の有力者をはじめ、多くの町人門徒に負うたのである。右の五名連判の本願寺宛誓詞にいう「横領」とは、このような門徒分立計画の意と解される。准如はこのような加賀末寺・門徒の分立を抑えるため下問少弐を下し、前田氏もまた秀吉の「御上意之旨」を楯に、准如へ別儀なきことを全末寺に強要したのである。なお、慶長二年に加賀教団で、このような御坊建立を意図した教如方別立運動があつたと考えることは、この頃多くの他の地方で、後述のような教如による御坊建立が進められていることから納得できるが、また、天正八年の本願寺と信長の講和後も抗戦をつづけた加賀の有力末寺専光寺が、その寺伝で、

「教如上人之時、加州古來之別院、以属両派故難有新造之企、国主中納言利長卿不許之故、教如上人命康宣及康元（専光寺九世及八世）、以当寺為本山之別院」「顯如上人遷化之以後、一宗東西騷動之儀御座候而、専光寺慶榮（八世康元）者、山奥ニ引籠罷背候得とも、其後東西両本願寺与罷成候ニ付、……其以後瑞竜院（前田利長）様御意を窺、慶長元年ニ御当地（金沢）江罷出、……寺致再興罷有候所、此寺慶長、式年、東本願寺、末寺与相定、……」（傍点筆者、以下同）

と伝え、教如のとき別院（御坊）新造の企があつて、利長が許さなかつたこと、専光寺は慶長二年に教如方についたことを述べていることでも、充分了解できるのである。さてその後、慶長五年の関原合戦には、利長は家康に応じて大聖寺の山口宗永を攻め、江沼・能美二郡を加増されて加賀全域を領するが、この合戦にさがけ利長は、同年三月十七日、さきに父利家が再興を許した准如方の金沢御坊に再び禁制を下して保護監察すると共に、教如方末寺を人質として金沢城に詰番させているのである。^(三三)

しかしながら、加賀藩内における教如教団の進展の事実に対しては、前田氏もこれを抑えることができなくなるのであつて、関原合戦後の安定期をむかえると、利長は自ら教如へ款を通じ、^(三四) 教如もまた、加賀の七日侍講中や加賀四

郡惣坊主衆門徒衆をはじめ加能越教団の助力によつて金沢に御坊を建立し、宗祖等身影像を下付するのである。^(三三)この教如方御坊の建立の時期は、早くとも慶長五年の関原合戦以後、遅くとも同八年六月教如が烏丸七条の新屋敷へ移る迄の間と思われる。そして、これ以後教如の加能越教団への経営も急速に固められてゆくのであつて、前章寿像下付裏書一覽表に示した越中・加賀への慶長六年からの寿像下付や、越中五カ山への本尊下付などは、そのわづかな一端を示すものにはかならない。

つぎに、教如は越後教団へも積極的に働きかけた。教如が、天正八年の大坂「抱様」を浄興寺や越後諸坊主衆同門徒中へ依頼したことや、つづいて越後の本誓寺を介して同国の上杉氏と結んで信長に抗したことは、先に述べたが、同九年頃教如は、浄興寺に「其寺之義、従前々有来候ことく、不可有相違候^(三四)」と申送つてゐる。また教如が、越後国惣坊主衆中同門徒衆中において、「其元連々各馳走之由有難候、弥頼入候^(三五)」と依頼したのもこの頃とおもわれる。かくして、越後の教団も多く教如に同調したと推定されるのである。その後、教如は東本願寺分立から間もなく、越後教団の中心的最有力寺院である本誓寺・浄興寺に自分の息女を嫁がせ、教団との密接な関係をつくりあげてゐる。この内、本誓寺宣英へ教如の息女玄耀院が嫁すのは慶長十年であるが、浄興寺教善へ同じく光晝院が嫁すのは、これよりやや遡ると考えられる^(三六)。かくて、教如と越後教団が密着したことは、今日、教如や教如家臣から越後諸々の末寺・講中などえあてた、「志」の送金を謝する多くの文書が現存する事実からも、明白に領くことができるのである。^(三七)

飛驒 つぎにやや断片的ではあるが、他の諸国の教如教団の形成について窺つてみよう。まず飛驒であるが、飛驒の本願寺教団の中心は、大野郡白川郷の照蓮寺と、吉城郡高原郷から越中八尾に移つた聞名寺とであつた。このうち教如に組したのは照蓮寺であるが、その直接の動機は、次の照蓮寺第十二代善了の六月四日付下間頼竜宛の書状に

「抑四月四日御書五月晦日謹頂戴仕候、忝難有奉存候、仍信長御一和之事、為勅定被仰扱候処、被応歎慮、御門跡様（頭如）至雜賀被移御座候、雖然彼方依有表裏、御当寺（本願寺）御堅固可被仰付旨ニ被仰出候、尤肝要奉存候、（教如の）御掟之趣御門徒衆江申含、涯分馳走可仕候、就中安心之一義決定可仕之由被仰下候、千万難有奉存候、如御掟嚙可申候、此等之趣可然様可預御披露候」^(三三)

というごとく、教如の要請に依えて、天正八年の教如の大阪「抱様」に依じたことにあつたと考えられる。このよう
な照蓮寺の教如への同調の裏には、すでに早く内島・三木・江馬・小鷹利・広瀬など在地武士と照蓮寺との結合があ
り、その武力を結集しての信長軍への對抗があつたものと推定する。照蓮寺の寺伝に、天正八年善了の子明了が紀州
雜賀の頭如を訪ねて得度し、同時に教如に謁して好を通じたというのは、^(三五)頭如・教如が義絶中のことに属しやや不
然であるが、この頃から照蓮寺が教如方についたことは事実であろう。その後天正十三年、秀吉麾下の金森長近が飛
驒に進駐するが、このとき、前記の在地武士は金森に抵抗を示し、また聞名寺の飛驒末寺も江馬氏と結んで反抗した。
そのため金森氏は、翌十四年九月聞名寺配下の飛驒大坊主をして、

「一、去年一揆はうき仕候段、聞名寺へハ一円きかせ不申候御事、一、向後奉対法印様（金森長近）へ諸事如在を存間敷御事」^(三六)
などと起請文をださせ、昨年の一揆に組した聞名寺配下は以後聞名寺に組せぬこと、今後は金森へ忠節をつくすこと
を、誓わせた。そして、さらにその翌天正十五年には、金森は秀吉の九州島津討伐に出陣するが、その留守中の国内
安定のため、照蓮寺を白川郷から城下高山に移させ、金森は照蓮寺に對し、

「一、対貴房にも如在仕間敷事、（中略）一、貴房門下之地江他門之者參候共門徒可被仕候事、（中略）一、法印様（長近）対貴
房御底意不殘候間御如在被成間敷御意に候事（以下略）」^(三七)

などの起請文を出し、とくに他の門徒をも照蓮寺につけさせることとした。これは、三木・広瀬などの浪人を照蓮寺に監視させる目的でもあつたが、こゝで照蓮寺は全く金森の統治下に入ることとなつたのである。この場合、前年に飛驒の聞名寺末寺を聞名寺に通じないようにさせ、さらに翌年他門徒まで照蓮寺下につけさせたことは、恐らく聞名寺と照蓮寺とが対立する動機をつくつたことと推測され、それがひいては、聞名寺を准如方へ、照蓮寺を教如方へ、より判然と分立させる一の原因となつたかとも推察するのである。

その後、寺伝によれば、照蓮寺明了は、「教如様御厚恩故に日本に教如様へ帰依の人一人あらば、我も参るべしとて時節を待給ふに、多婦依のよしをきき教如様へ帰依」を明確にし、慶長元年・三年・四年の連年にわたり教如を隠宅に訪ね、教如から院家格の素絹着用を許されたといふ。そして、同四年には教如から親鸞伝絵四幅の裏書下付を、また翌五年三月十九日には太子・七高祖絵像の裏書下付を得ているのである。かくして照蓮寺は、教如の東本願寺建立後、飛驒の東本願寺教団の中心として重要な地位を占めることとなるが、慶長十四年の再建には領主金森から寺領百石を許され、十四代宣了は金森可重女岩姫を迎え、十五代宣心は金森家から入寺して寛永十八年東本願寺宣如の女さな姫を迎え、このとき更に寺領二百石を増され、金森氏の藩屏としての地位を確立するのである。

出羽 つぎに、出羽における教如教団について、わずかに酒田の淨福寺に関するものを中心としてであるが、知りうる程度について窺つてみよう。出羽の本願寺教団が、すでに蓮如時代に北陸・信濃などと共に発展していたことは、その御文によつても充分察することができるが、さらに証如時代に出羽教団が淨願寺・西善寺・真教寺などを中心に教線を固めたことは、「天文日記」にこれら諸寺が散見することからもわかる。ところで、淨福寺は右の秋田淨願寺の開基弘順の弟明賢の開基といひ、肥後の菊池氏の出身と伝え、蓮如に帰依して莊内袖浦に寺基を定めたが、娘

の妙順尼のとき大泉莊酒田に移つたという。⁽⁸⁰⁾ 淨福寺が酒田を中心に、中世において在地武士と結びついて教線を張つたことは、天文十二年武藤氏の大泉莊内真宗道場破壊のとき、淨福寺のみはとくに存続を許されている事実⁽⁸¹⁾からも、推測することができる。なお出羽には右諸寺の他、山形の専称寺・秋田の西勝寺・酒田の安祥寺などが有力寺院としてあり、とくに専称寺は近世初頭に山形の領主最上氏の保護をうけて飛躍的な發展をとげた。⁽⁸²⁾

さて、教如は天正八年の大阪「抱様」について、これら出羽教団にも檄を飛ばしたのであつて、六月二十日淨福寺同門徒中宛、六月二十八日淨願寺同門徒中宛の檄文が現存している。⁽⁸³⁾ 教如と淨福寺などの出羽教団とが一つになるのは、このときからである。それは、翌九年九月顯如から義絶中の教如が、酒田安祥寺に裏書下付を行つている事実⁽⁸⁴⁾からも、しることができるのである。なお、出羽教団の教如への傾斜が如何なる教団事情によつているか、またその範圍などについては、詳しくすることができない。しかし、のち教如の別立後、とくに「出羽総坊主衆中」⁽⁸⁵⁾にあて、

「今度屋敷相替付而御影堂令建立候、時分柄之儀候へとも各馳走憑入候」⁽⁸⁶⁾と慶長九年の東本願寺影堂建立を報じているのは、すでに天正八年頃から出羽教団の広範圍にわたつて、教如への傾斜があつたことを推察させる。その後、隱居中の文禄五年に、教如が淨福寺に宗祖絵像・顯如絵像の裏書下付を行つてゐることは前に触れた通りであり、またこの外、教如から、⁽⁸⁷⁾（天正十一年）七月二十二日「秋田淨願寺門徒中」や、某年三月十四日「出羽酒田永照下門徒衆中」⁽⁸⁸⁾にあてて志を謝した消息もあるが、このような教如との結びつきは、当然、淨福寺以外の「出羽総坊主衆」との間にも形成されたと考えて、間違いないであらう。

大和 最後に、大和における今井道場と教如の関係について考察してみよう。大和高市郡今井の地は、大和の本願寺教団にとつて、たえず興福寺六方衆と確執をつづけてきた北部奈良方面の教団と、南部の一家衆飯貝本善寺や檜

川円光寺などの有力寺院を中心とする吉野教団とを結ぶ地点であり、さらに河内教団と大和教団を結ぶ重要地点であったが、ここには天正期に、在地土豪今井兵部(五)によって本願寺配下に属する道場が建てられた。この今井兵部について「大和軍記」は

「今井村と申所は兵部と申す一向坊主の取立たる新地にて候、此兵部器量のものにて四町四方に堀を廻し土手を築き、内に町割をいたし人をあつめ家を造らせ國中へ商売をいたさせ、又は牢人をはひあつめ候、然処に大阪一向門跡逆意の刻、右の兵部も今井に一揆を發し、近辺を放火し相働候を、筒井順慶仕寄にて半年計も被攻、終に落去せず、大坂扱になりて後は今井も扱になり、矢倉等をおろさせ、兵部は其まゝ信長公より赦免、先規に不替、今井の支配仕り、宗門を相続候、秀吉公時代も右の通にて居住候、」

という。すなわち、石山合戦のとき信長配下の郡山城主筒井順慶と戦い、顯如・信長講和のとき同時に開城し、信長・秀吉から安堵されたという。天正八年のこの大阪本願寺講和のとき、顯如は、四月二十一日大和本善寺へ、七月二十八日奈良(六)（奈良教団）へ、それぞれ、教如の「抱様」に同調せぬよう申送っているが、大和の場合は、右の「大和軍記」のいうごとく、恐らく顯如の講和に同調するのが大勢を占めていたこととおもう。これは、興福寺衆徒として興福寺に密着しつつ、たくみに戦国大名に発展した筒井順昭・順慶父子の領国支配が確立され、順慶と信長との連繫が成立しており、地理的にも大阪に密接していることを考えれば、当然であつたとおもわれる。

その後、「多聞院日記」には、天正十一年二月に、

「去廿日大坂坊主（顯如）京ヨリ下、社参了、事々敷、甲乙人拝之トテ群集了、則其子、今井ニ道場ヲ立、坊主ニ置之云々、又一向衆増倍、沈思々々、羽筑（秀吉）門徒ナル故云々、」（二月二十二日条）

と顕如の春日社見物を伝えるが、文中の「其子」は教如を指すとおもわれ、したがつてその頃教如が今井道場を取立てたことを示す。そして、この今井道場に置いたという文中の「坊主」は、さきの今井兵部ないしその関係者であろう。それは、「貝塚御座所日記」の同年八月十日条に、

「筒井順慶より新門様（教如）へ使者、大輪田又右藏門、今井ノ兵部同道、一腰一疋黒毛馬（段々）一頭秘藏云々、御対面御湯漬あり、……これは去春南都御見物之時、被成御音信、其返礼云々」

とあつて、今井兵部が教如への使者に、恐らく案内役として、同道していることから察しうる。これらの史料によると、今井兵部は、顕如の大阪本願寺講和の後、信長方の筒井順慶に降つたが、信長没後、顕如・教如の義絶和解が成るに及び、その今井道場は教如により復興されたことがわかる。この場合、なぜ教如によつたかは不詳であるが、少なくとも今井道場の場合は、他国の場合のように教如の「抱様」に同調して信長に対抗する過程で密着していつたものとは事情を異にし、すべての政治的和解が成立した段階に、いわば平隠裡に復興されたことがわかる。したがつて、他国の教団の教如との結合関係とは、質を異にしているのである。

以上で、一応、地域教団形成に関する瞥見をおわるが、この項を結ぶにあたり最後に付言すれば、教如教団の形成は勿論以上につきるものではない。まだ、興正寺准尊が教如につこうとしたような本願寺内部の問題や、教如の東本願寺別立をみて兄弟分立したという越前藤島超勝寺の場合など、なお個々に究明しなければならないものが山積し、さらに地域別の考察もなお地域全般にわたるものでなく、また外にも多くの論及すべき地域が残されている。しかし、以上の考察によつて、教如と結びついた地域教団形成の実態はほぼ明白とおもう。それは、教如の大阪「抱様」という中央の政治態勢を、各地域教団の特殊な、個別的な政治態勢にひきあてて、それぞれ同調を示すことから出発する。

したがつて、それはただ本願寺の教如の動きに賛同して事を共にするといった、単調な事情によつてゐるのではない。しかも全体として織豊政權が形成され、幕藩体制へ進む統一政權成立の時代の動向のなかにあつて、地域的な特殊性を内包しつつ、教如を中心とした統一的な教団へと進んでゆくのである。それは勿論、各地域の中世的な教団構造をそのまま継承するものではなくて、地域差はあるにせよ、各地の大名領国經營の權力のなかに吸収されつつ、各教団の權力構造が剝離されてゆく過程で、教如への求心的活動をすすめるところに、以上のような各地域の教如教団が形成されることをおもわねばならないのである。

(三) 講の成立

真宗教団における講の組織や機能などに関してはすでに多くのすぐれた業績が發表されている。とくに、笠原一男博士のごとく、主として講が末寺に直結し、本願寺はそれを上から統制したとみる考え方があり、これに対し、千葉乗隆氏のごとく、講そのものが僧と門徒と同列な立場で法主に直結するとする考方もある。^(一七)これについては、講の組織上、機能上の両面から考えられねばならない点があるとおもわれる。すなわち、本来、覚如の「報恩講式」に始まる真宗の講では、信仰集団としての宗教的講会であることを本質とするから、各講に下付された法主の御書（消息）拝読を紐帶とする組織形体は、千葉氏のいうごとくすべて法主に直結することとなる。しかし、講の機能面では、たんに宗教的な目的ばかりでなく、本願寺への志納金・勸進物を拠出する経済的な目的や、更にそれを円滑にするための統制上の政治的目的をもつから、この点からいえば笠原氏のごとく、講は階層的な教団の機能を果すものとみななければならぬ。要するに、講は宗教的・経済的・政治的な機能をもつて、階層的に秩序づけられつつ、法主に直属す

る性格をもつが、したがつて、教団においては、本末組織と併行して重要な教団構成の紐帯となるものである。教如教団の形成には、このような講の組織化がまた、大きな役割を果しているのである。

教如が講に下付した消息の数は、たとえば「教如上人御消息集」では四十五通を数えるが、ここに収載されないものがお数多く散在していることは、いうまでもない。これらの講を大別すれば、すでに教如以前に結成されたものを継承するものと、教如時代に新しく結成されるものとの二種となる。前者の例では、東本願寺「申物帳」^(二五)記載の、元和元年八月二十八日に宣如が消息を下付した「加州河北在方所々九日講中」や、同三年四月二十五日に同じく消息を下付した「加州金沢石浦町野々市同行衆廿八日講」などがあり、これらは、「天文日記」天文五年四月十七日条の「河北郡九日講」や、同年二月十九日条の「加州野々市廿八日講」を継承するものとおもわれる。したがつて、右の例は、何れも慶長十九年教如没後の「申物帳」の記載ではあるが、すでに教如在世中にこれらの古い講との関係があつたものと推定しうる。そしてそれは、恐らく教如が東本願寺を建立する以前から、或は天正八年の大阪「抱様」を契機として、教如につき、教如への懇志を運んだものであろう。また「河州茨田郡十七ヶ所内下六ヶ所十日講」のごときも、そこへ下した教如の消息に、「其元往古より会合無退転被相統之由尤有難候」^(二六)といつていたので、前者に属することがわかる。その他、教如は、能登「サキ山十八日講衆」や、「美濃尾張十六日講十三日講坊主衆」や、某国「十三日講中諸坊主衆」などに、天正八年の段階で、大阪「抱様」の消息を送っているが、これらの古い講も、以後そのまま教如につく場合が多かつたであらう。その他前項で考察した、近江下寄組の講組織なども、この部類に属するものである。

これに対し、教如のときに新しく結成された講がある。それは、大阪「抱様」に同調した地域教団が、それを契機

に以後結成するものや、もし後の教如隠居中ないし東本願寺建立間もない頃に結成されるものなどであるが、これらは、前項で考察した地域教団形成と併せ、教如教団が成立してゆく実態をみる大きな手がかりとして、重視しなければならぬ。本項ではとくに、この教如時代に結成された講について、一、二実例をあげて考察してみたいとおもう。

近江においては、江北教団が教如に帰し、旧長浜城に総坊を置いて慶長元年十四日講を結成したことは先に述べたが、その他、江西には三浦講、江北にも北郡十五村講などが結成されている。まず江西の三浦講の結成について考察してみよう。三浦とは、江西高島・浅井兩郡中の琵琶湖の今津・海津・大浦の三港津を惣称したが、とくにこの地方の真宗教団は、三浦衆・三浦惣中などとよばれて、有力な地方教団を形成したのである。三浦教団の初見は、天文十四年二月本願寺家臣から三浦惣中にあて、本願寺への寄進米完納を強く申入れた文書に於てである。⁽¹²⁾この文中に、本願寺から近年そのことを高島南市の祐珍に申入れたが如何したか、との意味のことを述べているが、この祐珍は「天文日記」に高島の祐珍として頻出し、本願寺の定例法会の齋などに招かれており、三浦衆中の有力者である。また祐珍は「天文日記」で、「十日講衆海津祐珍」としてもあらわれ、またこの十日講は、「就当番事、海津十日講、于時今津道了云々」ともあるので、⁽¹³⁾祐珍は十日講の有力者でもある。そしてその十日講は、海津の門徒を中心とし、今津の門徒も含んでいたことがわかる。ここから、三浦衆は、十日講などの組織を内部にもつ三港津地方の坊主・門徒の集団であることをする。しかし、十日講は必ずしも三浦衆全体の講とおもわれず、三浦全体としての講組織は、なお未成立であつた。このような三浦衆が、元龜元年の江西における浅井・朝倉対信長軍の戦に慈敬寺と共に戦つたことについては、すでに第二章第二項で触れた。⁽¹⁴⁾

さて教如は、天正八年閏三月二十五日と同年五月十三日の両度にわたり、この「三浦坊主衆門徒衆中」にあて、大阪「抱様」への同調をもとめ、さらに八月十六日には、やむなく大阪退出に至つたことを報じた。^(二四)この大阪「抱様」の要請を契機として、以後、三浦衆が教如側についたことは、のちに、教如がまだ東本願寺を建てる以前の某年、准如が越前へ下向のため江西を通過したとき、教如側の下間頼竜から三浦衆にあてて、

「近日理門様（准如）越前へ御下候由、定而可為御通候間、此方へ一味之衆ハ坊主衆之儀ハ不及申、下々御門徒衆も一人も出合不被申候様ニ、能々可申下之由御意候、内々可被得其意候、為其被挑御印者也」^(二五)

と申送っていることから、充分察することができる。このような三浦衆と教如との結合があつてはじめて、さき第一章の寿像下付一覧表に掲げたような、早くも隠居中の慶長六年十二月に、三浦衆の一員願慶寺慶尊への教如寿像の下付がおこなわれたのである。ところで、三浦衆の結成した講が始めてあらわれるのは、ずつと後の寛文四年八月の、「三浦坊主講中可相守掟之事」七カ条^(二六)においてである。したがつて、一見、この年に規則を定めて始めて講結成をしたごとくみえる。しかし実はこの年七月、京都の東本願寺派の洛陽八講中が仲介して、慈敬寺に対する三浦衆の与力問題が解決された事件があり、右の講の掟は、この事件を介して講の再編成をなしたものであつたのである。そして、この八講中仲介の連署状に、「教如様御代、七拾年以前、子細御坐候而慈敬寺殿与力ヲ放」つたとあり、三浦衆の講結成は、この教如時代の慈敬寺与力解消が動機であつたと考えられる。さらに右の掟の文中には、三浦坊主中へ下付された証如絵像を達拝し、証如祥月の八月十三日は農繁期のため、「毎年六月十三日ニ三浦惣坊主衆御講相勤諸事御役儀等」をつとめることをきめている。そのため三浦講はまた、「三浦十三日坊主講」ともよばれたのである。^(二七)したがつて以上の関係から、三浦講の結成は、教如時代に、証如の命日を講日として行われたものであることがわか

る。そしてその講では、

「今来古住当講之御法義相統之基と相成候者、教如上人様より頂戴仕候天正八年五月十三日之御書ニ御座候」^(二五)

というごとく、教如が大阪「抱様」を要請したさきの消息が紐帯をなしていた。以上の事情から推して、三浦講は、教如の大阪退出後から東本願寺建立前の時期に、慈敬寺与力解消を契機として、結成されたものと考えてよい。かくて三浦講の結成は、三浦衆と教如との結合を、今までよりも一層強固にする役割を果たすとも、新たに教如教団構成のための、経済力負担の一翼をになうこととなつたのである。

つぎに近江の北郡十五村講の結成についてみる。江北に早くから教如教団が形成されたことは、すでに考察したが、この講は、このような江北教団の局部で、結成されたものである。現東浅井郡丁野村本覚寺の寺伝によれば、同寺の中興了円およびその子了乗は、この地方の教化者であつたが、教如時代に宗意上の問題で使僧泉竜寺の取調べをうけた。しかし宗義に背かないことが認められたので、浅井・伊香両郡十五村の同行は札銀百匁を献上し、教如から御書を下付された。「夫より了円了乗は御書之御供仕、十五村を毎月廻在仕」^(二六)ることとなつたという。同寺には現在、「江州北郡十五村内講衆中」宛の、銀子百匁到来を謝し法義を勧める教如の消息と、「江州北郡了円了乗十五村講中」宛の東本願寺家臣下間少武法印頼賑の右消息の添翰とを現存している。^(二七)ところで、右寺伝に、了円・了乗が教如から宗意取調をうけたことをいうのは、教如が東本願寺建立を明確にする慶長七年頃に、配下の各地方教団に対し、盛に宗義遵守を促しているの^(二八)で、おそらく事実とみてよいであろう。そしてそれは、同じく慶長七年前後であつたであろう。さらに、了円・了乗を中心とする十五村講の結成は、この宗意取調を契機におこなわれたものと考えられる。それは右の下間頼賑の添翰の中で、「广大之御慈悲之趣有難被存節ニ参会候て、相互信不信之談合被申」と、講の参会・談

合を勧めている語勢からも、推察することができる。本覺寺了円が十五村に対し、如何なる関係をもつたかは不詳であるが、本覺寺は他の北郡坊主衆と共に大阪「抱様」以後、教如に帰したのであり、そのような教如側への傾斜を前提として、宗意取調を契機に講結成がおこなわれ、完全な教如教団としての体制を整えたものと考えるのである。

つぎに、洛陽講について触れてみよう。東本願寺建立後、京都の町民の間に多くの教如帰依者があらわれ、講結成がおこなわれたが、その代表的なものは洛陽二十人講であり、その他三条講・二条講・柳馬場講・橋詰講・新町講・五条講なども教如時代に結ばれたものであつた。この洛陽講については既に考察されているのでここでその経緯は抄略するが、これら諸講はいずれも町民のみで結成され、東本願寺に直結するもので、坊主衆が介入する地方の講とは性質を異にする。すなわち、懇志金を運ぶ点では地方の講と同じであるが、地方の講が先述のような地方教団と本願寺の間の宗教的・経済的・政治的な結合の機能達成の意味をもつたのに対し、洛陽諸講は、宗教的な契機の外に、主として、東本願寺に結びついた、町民側の御用商人的な利害関係が講結成の動機になつたと考えられるのである。しかし、洛陽諸講の成立により、教如の東本願寺が、町構成の上からいって、京都市内に、より安定を深める支点を得たことをおもうべきであり、地方の講と共にその意義は大きい。

以上は、教如のときに結成された講のわずかの例にすぎない。しかしこのような講は、なお数多く蒐集しうる筈で、今後補足してゆきたいとおもう。ここでは、古い講組織を継承してゆく場合と共に、講が、地方教団が教如側に組みかえられてゆく上での、大きな役割の一面を担っていることを注意しておきたいのである。とくに、織豊期から徳川期にかけての教団変質化の過程で、旧来の講や新たに結成される講が、中央への求心的要求によつて、自ら地方教団の安定化、再組織化をはかつたことが考えられねばならず、教如と講の結合はこの面から考察されるべき点が多い。

さきの三浦講が慈敬寺との与力関係の解消を契機に講結成をなしたときは、このような、地方教団変質の過程で再組織されてゆく事情の片鱗がうかがわれる。

結章 教如の教団再編成

以上は、教如教団の成立について、その発端は天正八年の大阪「抱様」にあること、それ以後、教如は地方末寺門徒に対し、「本願寺教如」としての立場を終始堅持しつづけたこと、また家康が東本願寺建立を認めたのは、その領国経営から幕藩体制形成の過程で、拡大化する教如教団を政権のなかに組込むための必然的処置であつたこと、一方、地方教団の側でも、各地の大名領国制形成の過程で、中央への求心的活動をおこし、それが、大阪「抱様」以来の教如との関係から、教如を中心とする教団形成を促進することとなり、それは地方の末寺集団、有力末寺、講組織などの教如との結合となつて示されること、などを考察したのである。

かくて、新しく教如教団が形成されることとなつたが、それには更に、全教団を統攝するための、教如による教団再編成がおこなわれねばならなかつた。そしてそれは、単に新教団に上からの枠をはめるということではなくて、社会的発展にともなう教団変質に対応して、新たに集権的な教権体制を確立することを意味していた。ところで、社会的発展による教団変質を最も端的に示すのは、従来の本願寺による地方教団統攝の役を果たした一家衆寺院の後退と、大名領国制の発展に併行して顕著に示される地方教団の近世的教団への脱皮であろう。

一家衆寺院が、蓮如時代以後、「御開山のちのみち」を継ぐ法主の代官・名代として地方門末に臨み、坊主・門徒の教化や統制にあたり、地方教団で特別な権力をもつたことなどについては、すでに明らかにされている。^(註)しかるに、

一家衆のこのような権威は、当然地方有力寺院と対立することとなり、その結果、戦国期の教団発展の段階において、やがて一家衆は後退せざるをえなくなつた。このことは、すでに考察したごとく、三河における一家衆本宗寺と上宮・勝鬘・本証三カ寺との対立や、加賀における一家衆本泉寺・松岡寺・光教寺などと由緒寺院超勝・本寛両寺との対立と享祿四年大小一揆による一家衆の敗退や、越前における天正二年後の一向一揆に際し、一家衆西光寺・専修寺・照護寺などと在地坊主衆との利害相反が一揆敗北の一因となつたこと、などによつて明白である。そして、このように一家衆が後退しなければならぬ最も基本的な理由としては、莊園制が解体して農民の惣結合が進展する時期にあつて、一家衆が、なお旧い莊園領主や土豪と妥協して教団維持をはかつたために、却つて孤立化せざるをえなかつたことが指摘されている。^(一七五)このように教団統制力を消失した一家衆は、永祿二年十二月顯如の門跡補任以後、院家に勅補されてその地位を保つこととなる。しかし一家衆の教団における機能は殆んど消滅するのであつて、とくに近世以後は、一家衆は東西本願寺との血縁關係寺院を意味するのではなく、単なる有力末寺に対する対遇となり、官金^(一七六)上納金により免許されることとなるのである。

しかし、教団の再編成の必要は、一家衆の無力化だけによるものではなかつた。それは、地方教団そのものの根本的な変質によるものであつた。地方教団の変質は、各地における大名領国制発展の過程で、教団がその支配体制に吸収されてゆく方向のなかで示されてくるが、とくに秀吉政権確立の過程で漸次全国的におしすすめられる検地は、地方教団の構造を根本的に変革させたものと考えられる。すなわちそれは、一方では、たとえば江北十カ寺教団が、天正十九年の検地で、一揆の原動力となつた地侍的性格を払拭して近世的寺院として転生したごとく、^(一七七)地方寺院そのものの性格を変質させ純寺院化させる働きをもつた。さらに、より根本的に、寺院を支えた門徒農民そのものが、刀狩

令による兵農分離策や、人改め、人返しによる身分統制策などと共に、検地による小農民自立策により、集権的秀吉政権の支配下に吸収されることで、変質せざるをえなかつたのである。したがって地方末寺はもはや、封建体制維持のための生産階級として政治機構に組みこまれた純農民に、単なる宗教的關係による、門徒としてのつながりをもつにすぎないのである。そのため当然、末寺には新たな權威による門徒農民支配が必要となり、純寺院化した自己の保全とも併せて、新たに本願寺への求心的活動がおこされ、新秩序による教団再編が要請されるのである。このような検地による末寺・農民の変質化は、とくに天正十八年頃の秀吉の全国統一以後に活潑化すると考えられるが、しかし勿論それ以前の段階の検地でも、地方教団はすでに変質、弱体化せざるをえなかつたのである。例えば、天正十三年に顕如が本願寺々基を大阪天満へ移すとき、広く門末から懇志を集めたが、このとき家臣下間仲康（仲之）は近江野洲・粟太兩郡の坊主・門徒や与力武士に対し、

「仍至摂州中島河崎（天満）、被移御座、御堂始其外御作事在之事候、……然者其許就^レ検地、可^レ為^レ不^レ如意^レ与^レ被^レ思^レ召^レ、自上様（顕如）御勸進之儀被仰出問敷之旨候、」^{（七五）}

と申送つてゐる。すなわち、兩郡の教団が検地により財力逼迫のため、募財を見合わすという。なお、当地の秀吉時代の検地は、天正十一年・十三年・十九年に実施されている。^{（七六）}

さて教如は、このような教団構造の変質と、一家衆組織の教団統制力の消失の時代にあつて、教団再編成をおこなつたのである。前述のごとく、教如が、自己への求心的活動を活潑にする地方教団の再編を育成し、またそれら地方教団に終始「本願寺教如」の立場で対していつたのは、その具体的な姿であつた。しかし、教団再編のためには、更に、弱体化した一家衆組織に代つて、「本願寺教如」の藩屏として地方教団を統撰する組織が必要であつた。そのた

めに実施されたのが、地方有力末寺と教如との姻戚関係の構成であり、また地方御坊の建立であつた。このうち、地方有力末寺と教如との姻戚関係については、さきに、越後の淨興寺・本誓寺へ教如息女が嫁したことを考察したが、さらに「大谷一流諸家分脈系図」により、越前の西光寺・本瑞寺、加賀の専光寺・勸帰寺、尾張の興善寺、摂津の教行寺、河内の願得寺、播磨の本徳寺などへ、教如の息女や姉が嫁いでいることを示していることができるのである。⁽¹⁵⁾これらの寺院には、西光寺・教行寺・願得寺・本徳寺のごとく、従来からの一家衆に属するものもあり、さらにこのうち教行寺・本徳寺はすでに院家に勅補されており、また、本瑞寺のごとく新たに御坊を建立して息女を入寺させた特殊なものも含むが、いずれも近世以後の地方有力寺院として存続した末寺であつたのである。これら有力末寺に姻戚関係を通じて直結することで、地方教団を掌握しうる意味が強いことを思わねばならない。

つぎに、教如が地方に御坊を建立したことについては、すでに近江々北の長浜御坊・五村御坊の建立や加賀における金沢御坊の建立について述べたが、更になおこの外の各地にも多くを建立しているのである。そのうち史料的に明確なのは、摂津の難波・天満・茨木の諸御坊、山城の伏見御坊、近江の大津御坊、越前の福井御坊であり、この外、安芸の広島御坊、武蔵の浅草御坊、大和の大谷御坊、美濃の竹ヶ鼻御坊、和泉の堺御坊、河内の八尾御坊、甲斐の甲府御坊、美濃の岐阜御坊、伊勢の桑名御坊なども教如開創を伝えている。⁽¹⁶⁾以上総計十八カ所で、江戸時代末までの東本題寺配下御坊総数四十カ所の約半数にあたる。以て、教如が如何に御坊設立に努力したかがわかるであろう。これらの御坊には、のちには法主一族の連枝が住職となつて下り、法主の名代として門末掌握にあたるものも出来たが、教如の時代には主として輪番が派遣され、教学や宗政の面で、地方教団の統制にあたつたのである。かくして、新たに、或は有力末寺と姻戚関係を結び、或は地方要地に御坊を設立することによつて、全教団の統制、把握につとめた

のである。かくして、上部組織においても、下部構造においても、名実共に、教如による東本願寺の分立が成立したのである。

以上は、東西分派の問題について、教如教団の形成事情を中心にして考察したのであるが、要するにそれは、単に中央の本願寺内部の事情によつてのみ惹起された事柄ではなくて、社会的、政治的な変革に伴つて進展する地方教団の変質に対応して、形成されたものであることをしらねばならないのである。慶長年間には、新しく寺号が免許され、新寺が建立されるピークであるとして^(八四)いるが、それはまた、純寺院化した地方教団が、教団の再構成のための求心の活動をおこし、またそのような教団を基盤とする中央の本願寺でも、教団の再統制をはかるのであり、それが幕藩体制確立期において、もつとも具象的にあらわれたものというべきである。なお、これで一応本稿を閉じたいが、本稿においては、東西分立の問題を、ただ教如側に則してのみ考察したのであつて、さらに准如側の事情や、地方教団における教如対准如の関係で出てくる帰趨問題、あるいは、地方末寺の下部の門徒農民の東西分立にからまる軋轢問題などにも、留意しなければならない問題が残っている。これらの点については、諸彦の御教示をえて、更に後日の考察を期したいとおもう。

- (一) 辻善之助氏『日本仏教史』近世篇之一、第九章第四・五節。藤島達朗氏「真宗東西分派の一視点——教如の立場を中心に——」(『大谷史学』第六号)。なお、これにつづくものとして、赤松・笠原両氏編『真宗史概説』第八章第一節。上場謙澄氏「教如上人と難波別院」(『真宗研究』第九輯)などがある。

- (二) 辻善之助氏『前掲著』参照。

本願寺教団の東西分立

(三) (天正八年) 五月二十五日、粟津惣中・波佐谷惣中宛の教如消息。同年頃の教如消息断簡。(共に宗史編修所編『教如上人御消息集』)。尚、教如の同内様の檄文は、辻博士が四通を挙げ(『前著』参照)、また宗史編修所編『補遺教如上人御消息集』を中心に、更に九点を追加しうる。

(四) (天正八年) 四月十五日、江州南郡坊主衆門徒衆宛。同日、越中坊主衆門徒衆宛。同月二十三日、堺惣門徒中宛。各願如消息(『願如上人文書』続真宗大系十)。尚、願如の同内容の消息は、辻博士が二十四通をあげている(『前著』参照)。

(五) (天正八年) 八月九日、近江ヒノマキ坊主衆中同門徒衆中宛、教如消息(『教如上人御消息集』)。

(六) (天正十年?) 二月二十日、宛所欠、教如消息に「仍無事に山の中までのき候、……甲州へ心かけ候へは、俄に路次不合期故、か様の始末候」(『教如上人御消息集』)とあり、文中の甲州は武田勝頼を頼ろうとしたことを示す。また「大坂籠城記」に「教如上人モ和歌ノ御滞在無覺束思食、其ヨリ南都ノ方へ立退玉ヒ、照光坊案内者トシテ、江州ノ板波へ忍セラレ、世ノシズマルヲマタセラル」というのも、あながち全部を否定できない。尚現在、滋賀県東浅井郡板並および北方部落の甲津原では、石山合戦時に願如・教如が当地に下向したとき、慰めた踊と伝えて、盆踊を願教踊と称している。

(七) 以下の辻善之助氏の願如・教如密計説に関しては、同氏『前掲著』を参照のこと。

(八) 閏三月二十七日、紀州惣門徒中宛、願如消息に、「重而染筆候、仍当寺和平之儀、拘様難成付而、禁裏へ御請申入候、其子細者、予か身命をはたし候へハ、一流断絶之事歎入候て、能々加思案候処、内輪之乱出来候事、言語道断、敵人之聞一大事此時候、……今度多人数のほり候へとハ、何より申候哉、さやうの儀、予か外ニハ有間敷候、只今開山聖人守申可令下向候間、御迎船并警固之人数早々参上之儀頼入候、万辛勞ながら遅々候てハ不可有詮候……」(『願如上人文書』)。

(九) 天正八年四月八日、刑部卿法眼(下間頼廉・少進法橋(同仲之)・按察法橋(同頼竜)宛、鈴木孫一外十名連署状に、「今度御間之儀付而、乍憚致御使候、しかれハ御くしの御事、二のきりまで新門跡様へあつけまいらせられ可然奉存候、此儀あはれく於被成御心得者、忝可奉存候、向後亦可為御門跡様次第候、重而被仰事御座候者、関之儀者一統ニ、御出船之御供

申可罷下候、右之旨若於偽申者、如來聖人様罷蒙御罰可墜在無問者也、仍誓詞如件、」(『顯如上人文書』)。

(三) (天正八年) 四月十七日、垂髮中宛、教如消息に、「連々御くしの儀申入、御契約勿論候、……此段者御約束を有ながら、既御出船之期に臨で、御くしと号せられ、毫拱寺より被上候を被下候段は、御造意あまりなげかし候、其子細者三段に申入候き、御影像の事千万望申度候つれども、御意にしたがひ申上者、御くしをのこし御申候へ、と申入候き、それを御同心候はずは、無本意存候へども、毫拱寺被上候、御くらに御入候御影像を残し被申候へ、其まゝ安置申べきと、三段に事を分て申入候所に、御くしと名付られ、数年つゝがなき御影像を目の前に御くしをぬき、剩御筒鉢をくづし破焼申さるゝ段、誠に無仏世界と申べき歟、前代未聞候、……」(『顯如上人文書』)。

(二) (天正八年) 七月二十三日、刑・豊宛、教如消息(辻善之助氏『日本仏教史』近世篇一、所収)。

(三) (天正八年) 十一月二十八日、若狭惣坊主中同門徒中宛、教如消息(『教如上人御消息集』)。

(三) (天正八年) 九月十三日、照蓮寺同門徒中宛、下間頼竜書状(『顯如上人文書』)。

(四) (天正八年) 四月十五日、南郡坊主衆中門徒衆中宛、同日、越中坊主衆中門徒衆中宛、四月二十三日、堺惣門徒衆中宛、各顯如消息。(天正八年) 四月二十一日、本善寺宛、下間仲之・頼廉書状。四月十六日、照蓮寺宛、下間頼廉書状(以上『顯如上人文書』)。

四月十五日、能州坊主衆中門徒中宛、顯如消息。四月十六日、同所宛、仲之・頼廉書状(以上『加能古文書』)。

(五) (天正八年) 閏三月二十五日、新門主(教如)宛、顯如消息。閏三月二十八日、垂髮宛、教如消息(共に『顯如上人文書』)。
尚、垂髮は教如の弟准如(四歳)を指すと思われ、間接的に顯如に答えたものである。なお、この父子贈答の消息については、辻博士は、後世の偽作かと疑い、その理由に、父子共に尚本願寺内にあり乍ら直接面談せぬことの不自然なことをいつている(『前掲著』)。しかし共に案文が本願寺文書中に伝えられており、内容的にもさして疑点はないと思われ、また意見を異にした父子が同一寺内で書状を交しても、必ずしも不自然ではない。

本願寺教団の東西分立

一四〇

(六) 谷下一夢氏「教如上人内室考」(『真宗史の諸研究』所収)。

(七) 辻善之助氏『前掲著』。

(八) 「駒井日記」上、文禄二年閏九月十六日条。

(九) 「宇野新蔵覚書」(統真宗大系本) 第一・三・六・九・一〇・十二・二十三項。

(一〇) (天正八年) 八月三日、加賀四郡中・鈴木出羽守・山内惣庄中宛、願如消息(案文)(『願如上人文書』)。

(一一) 宗学院編修部編『東本願寺家臣名簿』(宗学院編修部報) 十八(二十一)によれば、寺内織部は、東本願寺家臣寺内家の項に「順世 新左衛門、伯耆、織部景林男」とある。景林に相当すると思われる、また井上善五郎は、同家臣井上家の最初に「守重 権左衛門、寛永元甲子年七月十一日被召出、絵所松本帯刀弟、慶安二己丑年二月十六日卒」とある。絵所松本家から守重が入って継いだ井上家の祖と思われる。

(一二) なお、藤島博士により、昭和三十一年六月二十三日大谷史学会大会(論題「本願寺東西分派の一視点」)で発表された西福寺恵空(正保四年—享保六年)自筆文書には、「東江御別之衆古座、下間あぜつ・下間しやうに・七里新之丞・鶉(宇)野もと・松尾・いなば・横田いづ・横田河内・細井たしま・川なべ甚兵衛・川なべあき・稲波ノ家・粟津大進・石井さい阿弥・留井しま・かい田七郎兵衛・たがいづも・さぬき・ほうき・松井若さ、右是まで侍衆まで也、かうじやう(綱所)、手塚仁左衛門・西川半之丞、ばん衆かた、石原源之丞・のど川弥兵衛・藤井八郎左衛門・さかい孫四郎・村井六左衛門・伊藤久内・六蔵、中居衆、かいだ忠兵衛・五左衛門・平井孫右衛門・吉右衛門・伝兵衛・半左衛門・三浦家」などと三六名の家臣をあげている。これは、慶長七年、分立が行われた頃の東本願寺家臣団と思われるが、これによつても、すでに分立以前から教如方に組する多数の家臣の存在が推察される。

(一三) この間の考証については、辻善之助氏『前掲著』、藤島達朗氏『宣如上人のことども』参照。

(一四) 註(一)の藤島・上場両氏の論文参照。

(二五) また「本願寺作法之次第」には、「願如上人御時、御病氣によりて不斷酒ばかりにて御煩候し間、本尊開山の御うら書もあそばさず、慶聞坊竜玄越中正珍御堂衆にかゝせられ、御判ばかりあそばしたると存候、さ候間、実如上人の御時、みなあそばし直され候、聊爾なるとてあそばし直され候」という。裏書下付が少くとも蓮如頃からは、法主権を示すものとして重視されたことが、明らかである。

(二六) 「宇野新藏覚書」(前掲本) 第四項。

(二七) 上場謙澄氏は、(一)天正九年二月二十三日裏書「証如絵像」(岡崎市願照寺藏)、(二)同年三月二日裏書「親鸞伝絵(四幅)」(岐阜県安養寺藏)、(三)同年十二月二十三日裏書「太子七高祖絵像(二幅)」(同寺藏)、(四)天正十五年三月二十八日裏書「親鸞絵像」(京都市泉庵寺藏)、(五)天正十六年四月十三日裏書「蓮如絵像」(尼崎市浄正寺藏)、(六)天正十八年十月二十四日裏書「証如絵像」(島根県光西寺藏)を報告している(前掲論文)。また筆者は、(一)天正九年九月十三日裏書「親鸞絵像」(酒田市安祥寺藏)、(二)同年六月十三日裏書「太子七高祖絵像」(滋賀県称名寺藏、但し福田寺へ下付のもの)、(三)天正十年八月十八日裏書「方便法身絵像」(滋賀県蓮受寺藏)をみいだした。また岡崎市勝鬘寺藏「尾張三河之分、末寺触下絵讀之控」には、(一)天正九年一月二十八日裏書「証如絵像」(尾張下田井村西方寺)、(二)同年七月十三日裏書「同」(尾張戸田村浄賢寺)、(三)同年八月十三日裏書「同」(尾張名護屋村法藏寺)、(四)同年九月二十八日裏書「同」(三河西之町称念寺)、(五)同日裏書「同」(尾張尾塞村善徳寺)、(六)同年十二月十三日裏書「同」(尾張戸田村宝泉寺)、(七)天正十年二月三日裏書「同」(尾張蟹江村徳円寺)を掲載している。

(二八) 普通、「集古雜篇」は元禄十五年慧空著を指すが、本書(筆者藏、写本)は、同じく慧空の奥書があり、元禄十四年九月十一月の間に、肥後安国寺某僧の篇集を本願寺家臣八木監物が写したものの慧空書写本である。元禄十五年著の資料となったものであろう。

(二九) 上場謙澄氏は、(一)文禄二年二月八日裏書「親鸞伝絵(四幅)」(小浜市証明寺藏)、(二)同年五月十三日裏書「親鸞絵像」(大本願寺教団の東西分立

本願寺教団の東西分立

一四二

和高田市正行寺藏)を報告している(前掲論文)。また東本願寺藏「集会所日記」(元禄十六年八月二日条)には、(一)文禄二年六月十七日裏書「親鸞絵像」(加賀静照寺)を記録している。

(三〇)

藤島達朗氏は、(一)文禄四年八月某日裏書「顕如絵像」(大谷派小松教区保管)、(二)同年十月十九日裏書「親鸞絵像」(同)、(三)文禄五年四月十八日裏書「同」(福井県諦聴寺藏)、(四)慶長三年四月二十一日裏書「同」(愛知県聖蓮寺藏)、(五)慶長四年四月十五日裏書「顕如絵像」(岐阜県信願寺藏)を報告し(前掲論文)、上場謙澄氏は、(一)慶長二年五月十日裏書「親鸞絵像」(堺市浄得寺藏)、(二)同年八月十三日裏書「顕如絵像」(岡崎市安受寺藏)、(三)慶長三年六月二十六日裏書「親鸞絵像」(大坂市妙琳坊藏)、(四)同年十月二十八日裏書「同」(大和郡山市常念寺藏)、(五)慶長四年一月二十八日裏書「親鸞伝絵(四幅)」(高山市大谷派高山別院藏)を追加報告し(前掲論文)、筆者も、(一)文禄五年四月二十三日裏書「親鸞絵像」(酒田市浄福寺藏)、(二)同日裏書「顕如絵像」(同寺藏)、(三)慶長二年八月三日裏書「顕如絵像」(愛知県上宮寺藏)、(四)慶長六年二月二十八日裏書「同」(滋賀県長浜市浄琳寺藏)、(五)同年六月十四日裏書「同」(同県授法寺藏)を発見した。更に、『近江国坂田郡志』第五卷には、(一)文禄二年十月裏書「方便法身絵像」(滋賀県坂田郡光覚寺藏)、(二)同年十二月裏書「同」(同郡蓮沢寺藏)、(三)文禄四年裏書「同」(同郡勝専寺藏)、(四)慶長五年二月十五日裏書「同」(同郡通来寺藏)、(五)慶長七年十二月四日裏書「同」(同郡大雲寺藏)を、『大通寺史』(写本、滋賀県大谷派長浜別院藏)にも(一)慶長六年六月二十四日裏書「顕如絵像」(滋賀県下寄組藏)を、岡崎市勝鬘寺藏「末寺触下絵讀之控」には、(一)慶長三年七月二十三日裏書「蓮如絵像」(尾張春田村浄栄寺)、(二)慶長六年九月二十九日裏書「顕如絵像」(三河西尾須田浄賢寺)、(三)慶長七年九月十四日裏書「同」(三河細池浄徳寺)、(四)同年十二月二日「同」(尾張巾下深井丸興西寺)を、「白川照蓮寺濫觴記」には(一)慶長五年三月十九日裏書「太子七高祖繪像」掲載している。以上二十を点を数えるが、この期の裏書下付は尚今後多く発見されるであろう。

(三一)

藤島達朗氏前掲論文。

(三二)

宮崎円遵氏『続 親鸞とその門弟』、同「親鸞の寿像『鏡御影』私考」(真宗史研究会編『封建社会における真宗教団の展

開』所収)、本願寺史編纂所編『本願寺史』(第一卷)など参照。

(三) 東本願寺蔵「集会所日記」(元禄二年六月十六日条)に、「越後新潟勝楽寺殿より書状到来、門徒中常如様御寿影願望之由申来、右遂言上候処、御寿影之儀何方へも御免不被成候間、其旨可申遣旨被仰出、」とある。

(四) 宗学院編集部編『東本願寺史料』(嘉永元年四月十二日条)に、常陸水戸の善重寺・願船寺両寺に対し、「右先年水戸領寺院取潰之節、第一善重寺次願船寺甚相敷、仮令身分如何躰ニ相成候共、寺地取潰帛俗之儀へ飽迄不承知之段申断、当時元形ニ相成候節迄取積候ニ付、神妙之儀ニ思召、今度為御褒美左之通被下之。御寿像様一幅、内陣色裳附御品被下、善重寺。御寿像様一幅、願船寺。」と達している。

(五) 寿像にも、その法主自らの裏書がなされるから、当然、裏書下付の概念に含まれるが、こゝではとくに寿像を重視して、本尊、宗祖像、太子七高祖像、歴代影像など、他の裏書下付と別個に扱った。

(六) 近江の(三)は『大通寺誌』(写本、大谷派長浜別院蔵)に、(四)は「湖北三郡寺院鏡」(長浜市浄沢寺蔵)に、(五)は『近江国坂田郡志』第五卷によった。越中の(一)は『補遺 教如上人御消息集』に、(二)は米沢康氏の御教示によった。加賀の(一)(二)は「蓮如上人と本願寺展(目録)」(昭和四〇年五月八日―二十三日、金沢市丸越デパート)により、(三)は上場氏前掲論文によった。美濃の(一)は「上檀間日記」(東本願寺蔵)(文化九年九月十日条)によった。三河・尾張の全部は、「末寺触下絵讃之控」(岡崎市勝鬘寺蔵)によった。なお、三河・尾張では勝鬘寺下の場合と同様に、上宮寺・本証寺の旧配下寺院などでは、今後、多くの教如寿像が発見される可能性がある。

(七) 藤島達朗氏「前掲論文」。

(八) 佐々木求巳氏「御文開板考」(「真宗研究」第九輯)。

(九) 上場謙澄氏「前掲論文」。

(四〇) 「宇野新蔵覚書」(前掲本)第二〇項。又、第十七項に、「太子七高祖之御礼銀、御影様なみに上り候儀は、稲波嘉兵衛君本願寺教団の東西分立

人被取次候時、被上候、其後年寄衆被召出、申物之取次御免被成候時、太子七高祖之御札銀、御影様二貼分に上げさせ候はんよし、(教如へ)言上被申候へ共、一度上げ来り候間、右之通に上げ候へと被成御意候により、于今上げ来り候事、」とある。

(四二) 同右、第十五・二十一・二十五項。

(四三) 「(粟津) 重要日記抜書」(統真宗大系本)、慶長五年閏十一月条「廿一日より七昼夜御法事、改悔御免、御私記上様(教如)。但し閏十一月は慶長六年で、この報恩講は、恵空が「遺跡大略」にいうごとく、慶長六年閏十一月とすべきである。

また同「抜書」慶長七年正月条に、「十五日如春様御祥月、御影頭如様南方に掛け十六日御日中過本御座へ掛候」「十八日覚如様御祥月御追夜、日没過御伝間七高僧を巻、覚如様御影懸け、蠟燭焼香」。

(四三) 「宇野新蔵覚書」(前掲本) 第二十六項。

(四四) 「重要日記抜書」(前掲本)、慶長八年五月条「五日晚方に御影様(宗祖像) 阿弥陀堂へ御移被遊候、七日早朝より御影堂こわし申候」、同年六月八日条「丑刻新屋敷仮御堂御厨子は坊主衆衣白袴にてかき申候、御開山様は新き御輿にて是も坊主衆長柄かき申、御堂僧其廻り取廻し、上様(教如) 其次、侍衆其次、内衆次第、御忍と候へ共松明以下如昼」、同年十月十八日条「阿弥陀堂上棟……」、同十一月十日条「阿弥陀堂御遷仏……」、慶長九年九月十六日条「御影堂御遷仏……」。

(四五) 藤島達朗氏「前掲論文」、および天満別院誌編纂委員会編『天満別院誌』参照。

(四六) 辻善之助氏『前掲著』、二七七頁。

(四七) 笠原一男氏『一向一揆の研究』第十四章・第十六章参照。

(四八) 「天正十五年丁亥九月朔日、教如様御下向ニ付末寺江ワリ付之帳」(上宮寺文書)。

(四九) 上宮寺文書。

(五〇) ①(前略) 先年家康へ礼銭之儀付而、与兵衛有私曲之由於其許寺申触、既家康へ訴訟申族在之由候、此礼銭之事於一切

与兵衛不致取扱之由候、……不謂儀申懸候事、不及是非候、急度被逐御糺明可被仰付旨候、与兵衛於無越度者申出輩可為曲言候、與門様（興正寺顯尊―教如弟）よりは是非共可被逐御穿整旨即以御印書被仰出候……。

二月十六日

刑部卿法印頼廉（花押）

勝万寺殿・本証寺殿・上宮寺殿人々御中

②「（前略）新御所様（教如）就御下向之儀、良乗堅被仰付被差下候、其子細者新門様之儀與門様之御理由堅被仰合候条、必先御当寺へ可被成御座候处、無其儀先佐々木殿さま（上宮寺）へ御成被成候儀者、去とてハ興門様被失御面目候、是併上宮寺殿被仰妨之故ト良乗一段迷惑被申候、……何共御勝事ニ奉存候、何トソ御分別候て可然之様ニ御申可為専用候……。

八月十九日

為次（花押）（上宮寺文書）

①は家康への礼錢につき三カ寺と本宗寺との紛争を示す本願寺家臣下間頼廉の書状。文中の「与兵衛」は山本与兵衛為次で、本宗寺の家臣である。②は三カ寺と本宗寺とが教如下向の受入れについて争つたことを示すもで、山本為次の書状。宛所を欠くが、本願寺家臣に宛てたものとおもわれる。

（五） 辻善之助氏『前掲著』、二五四頁。

（五二） 岩波講座『日本歴史』近世2―藤野保氏「江戸幕府」参照。

（五三） （慶長十三年）七月十九日、青山佐渡守宛、准如消息（富山県八尾、聞名寺蔵）。および、木倉豊信氏「本願寺門主准如光昭の越中通過」（『越中史壇』七号）参照。

（五四） 辻善之助氏『日本仏教史』近世篇之二、第十章第四節参照。

（五五） 赤松俊秀氏・笠原一男氏共篇『真宗史概説』第八章第二節——拙稿「宗教統制と真宗諸派」参照。

（五六） 辻善之助氏『前掲著』、近世篇之一には、教如「抱様」の消息として五十二通をあげているが、内七通は家臣の添状で重複するから四十五通となる。それに、『補遺教如上人御消息集』から九通と、筆者管見の（近江）三浦坊主衆門徒宛の後三

本願寺教団の東西分立

月二十五日と五月十三日付のもの（共に、滋賀県三浦講共有文書）、及び、四月三日付、江州北三郡中宛のもの（滋賀県河崎稔氏蔵）・三月〇日付、宛所欠のもの（滋賀県授法寺蔵）の四通、計十三通を合せると五十八通になる。顯如が「抱様」抑制を伝えたもの二十七通は、すべて辻氏同著にあげているものである。

- (五七)―(六〇) (五七)は、天正八年閏三月七日、（近江栗太郡野州郡惣中宛、教如消息。(五八)は、(同年)三月十二日、(美濃)浄土寺同門徒中宛、下間頼竜添状。(五九)は、同年七月二十三日、（近江）慈敬寺宛、教如消息。(六〇)は、(同年)五月十四日、(越前)浜三郷浦々志衆中宛、(同年)六月二十八日、(美濃)トキ明覚門徒中多良郷惣中宛、(同年)七月二日、(宛所ナシ、福井県願慶寺文書)、(同年)六月二十八日、(出羽)浄願寺同門徒中宛、(同年)六月二十日、(出羽)浄福寺同門徒中宛、(同年)五月十四日、〇十三日講中諸坊主衆中宛、各教如消息。(『教如上人御消息集』)。

- (六一) 笠原一男氏『前掲著』第十五章・第十六章参照。

- (六二) 北西弘氏「戦国大名と本願寺―武家門徒の問題をめぐって―」(『大谷学報』第四一卷三号)、同「一向一揆の解体」(『真宗研究』第八輯)参照。

- (六三) 拙稿「近世における真宗末寺の性格―近江湖北十カ寺教団の変容について―」(『日本仏教』第六号)参照。

- (六四) (天正八年)五月十七日、長照寺同門徒衆中宛(伊香郡唐川 同寺蔵)、(同年)三月九日、坂田郡徳満寺宛(長浜市同寺蔵)、(同年)二月二十三日、浄念寺同門徒中宛(坂田郡世継 同寺蔵)、(同年)三月〇日(宛所欠)(同郡上坂 授法寺蔵)、(同年)四月三日、江州北三郡中宛(長浜市 河崎稔氏蔵)、各教如消息。

- (六五) 天正八年卯月十五日、江州北郡坊主衆中門徒衆中宛、顯如消息(長浜市 河崎稔氏蔵)。

- (六六) 十カ寺の内の称名寺は一時退転したが天正十年七月、秀吉から還任を許され、浅井郡代官となり、金光寺・福勝寺は同十一年正月、秀吉から禁制をうけて、共に支配下に入った。またこれら寺院の地侍名主的性格の払拭については、註(六三)拙稿参照。

(六七) (天正八年) 八月十五日、江州鉄砲衆中宛、教如消息に、「今度者、各尽粉骨長々在寺之儀、難述紙面悦入候、尚以万事馳走頼入計候、從御門主(顯如)者御折檻候、迷惑察候、当国之者共迄も大坂相^抱拘儀馳走衆皆其分候、一向いはれざる儀候へ共、いたつら者共依申成、此分候、更驚ましく候、其領者尽請取候、一旦之儀堪忍有へく候……。」(『滋賀県史』第五卷所収、江北本願寺文書)。

十一月十三日、江州北郡惣坊主衆同門徒中宛、教如消息に、「態染筆候仍对今般爰元馳走人事、從御門主(顯如)被仰付候由候、自今以後菟角之儀申越族候共不可有承引候、不審事候者可尋越候、自然如何様之儀候共見放事有間敷候条、各得其意事肝要候、猶按察法橋(下間頼竜)可申候也、穴賢々々。」(長浜市徳満寺藏)。

(六八) 正月廿五日、福田寺同下坊主衆中宛、教如消息に「態染筆候、仍福田寺儀就子細有之、門主(顯如)不被成御免付、専此砌各於内輪恣之存分有之由沙汰限候、向後様牀可聞届候、可有得其意候、穴賢く。」(『教如上人御消息集』)。

三月十五日、ヒウカ(家臣某)宛、シン(信淨院教如)消息に、「(前略)フク田寺^總レンくノコ、ロトチカイ申ソロ、伊賀(家臣・栗津貞清カ)ニソノコ、ロヘ候ヘク候、ナニコトモく御ツ、ミカンヨウニテソロ……。」(『同前』)。

(六九) 註(六〇)の「大阪籠城記」参照。

(七〇) (天正十年頃カ) 九月十五日、蜂屋出羽守宛、教如書状(長浜市 徳満寺藏)。蜂屋出羽守は徳満寺第十六世立安の父、頼隆である(『近江国坂田郡志』第五卷)。「天正記」によれば、蜂屋頼隆は秀吉に従い、天正十年十二月に岐阜の織田信孝を討っている。但し「天正記」が頼隆を伯耆守とするのは、教如書状の出羽守とすべきであらう。

(七一) 「一枚起請文」(天正十三年正月二十五日釈教如(花押)) (坂田郡上坂 授法寺藏)。「同」(教如筆)(東浅井郡三川 頓証寺藏)。「同」(教如筆)(長浜市 勝福寺藏)。「(教行信証の証卷文)」(教如筆)(東浅井郡虎姫町 五村別院藏)。「(同信卷文)」(教如筆)(同郡五村 大村形策氏藏)。「(同信卷文の延書)」(教如筆)(坂田郡坂口 平野市介氏藏)。「(正信偈文)」(教如筆)(坂田郡飯村 徳善寺藏)。「十字名号」(教如筆)(長浜市 坂東市衛氏藏)。「九字名号(賛、正像末和讃一首)」

本願寺教団の東西分立

(教如筆) (東浅井郡三川 前田松治郎氏蔵)。

(七二) 『近江国坂田郡志』第五卷、『大通寺史』(写本、長浜別院蔵)。

(七三) 「為志青銅六千貫令到来候、各不浅懇志至覚候、抑一流安心之趣は、何のわつらひもなく難行雑修の心をすて、……。季秋十四日、教如(花押)、江北三郡志衆中」(『教如上人御消息集』)。

なお、十月十日付、江州北郡十四日講中其外志衆中宛の右と同文の消息があり(『同前消息集』)、それには「為志青銅六千匹到来」とある。右の文中「六千貫」も「六千匹」であろう。

(七四) 「宇野新蔵覚書」(続真宗大系本)第二十九項。文中の「田法」は、「布施山温故記」(福田寺蔵)の福田寺系図に「正芸十二浅井備前守長政ノ末男ナリ、院号伝法院、元和二年十月朔日遷」とある者に相当。但し、正芸を浅井長政の末子とするのは史実に合わない(『近江国坂田郡志』第五卷、参照)。

(七五) 「粟津日記」(大谷大学図書館蔵、粟津文庫本)の慶長八年十月条に「二日長浜へ(教如)御下向、十一日還御」とあり、同じく十五年九月五日「本門様(教如)長浜ヨリ夜九ツ時還御」とある。また「御堂日記」(大谷大学図書館蔵)では、慶長九年十月五日―八日の間、長浜に下向している。

(七六) 「態申候、長浜御堂屋敷替候由候、各諸事馳走肝要候就夫安心之一儀そこもとみたりかはしきやうに聞へ候、無勿体次第候、抑当流一儀においては、……。十月二十四日、教如(花押)、江州坂田郡惣坊主衆中惣門徒衆中」(『教如上人御消息集』)。
なお、同文の「江州伊香郡惣坊主衆中惣門徒衆中」宛のものもある。

(七七) 「五村略由緒」「五村御坊古記覚書」(以上、大谷大学図書館蔵、粟津文庫)。「五村御坊由来」「五村御坊由緒記」「明和九年大村与蔵口上書」(以上、東浅井郡本覚寺蔵)。

(七八) 寛文六年七月の五村検地帳には「一町五反六畝一步本願寺御堂」とある(文化九年「五村御坊由緒記」による)。

(七九) 『補遺教如上人御消息集』。また、代官日下善介の書状によれば、「五村御坊(坊)御堂屋敷」の肝煮のため、脇坂若狹・

東主計喜右衛門・同吉内・大路村三郎兵衛・宮部戸(五) 助・五村(大村) 刑部・中野源兵衛・与右衛門などの在地有力郷民が、日下善介を介して幕府に働きかけている(『滋賀県史』第五卷、四四八頁、杉江文書)。

(八〇) 『大通寺史』(写本、長浜別院蔵)。

(八一) 『御報謝帳』(元禄四年起、書継。下寄組所蔵)。「実如絵像」(下寄組所蔵)。これらの史料は本学助教授細川行信氏の提供をうけた。

(八二) 「天文日記」 天文十一年三月十八日条「就当番之儀、江州下寄衆^{五人}出也如毎月樽持参之、以下、同十三年五月十五日条、十五年三月二十二日条、十八年十一月十日条、二十年一月二十一日条、参照。

(八三) 註(三〇) 参照。

(八四) 十二カ寺の内、寛応寺は寛文頃、善照寺は慶長十九年、淨願寺は寛永頃、誓伝寺は貞享頃に各寺号を称している(『近江国坂田郡志』第五卷)。

(八五) 「妙輪寺由緒記」(岐阜県揖斐郡 妙輪寺蔵、文政頃)によれば、東浅井郡の本誓寺・光乗寺・万徳寺・法善寺・玄竜寺・蓮台寺・成満寺・極楽寺・蓮行寺・了西寺・宗玄寺・徳蔵寺・光泉寺・行徳寺・宮部村の休菴(毛坊主)・田村の同行六軒斗、坂田郡の蓮沢寺・願養寺・長願寺・極性寺・美濃広瀬村妙輪寺・坂本村伝明寺の計二十二所をいう。

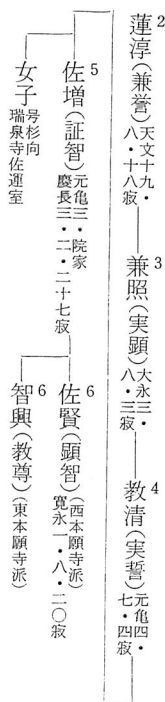
(八六) 「就信長御和平之御手筈、大阪御退城之御趣委細当国坊主衆御門徒衆中へ先度御門跡様(頭如)より頼御書候間、始中終可為聴聞候、随而誓願寺事、今般至雑賀、御供被申無二之忠節……所詮誓願寺御供と云、第一御開山善知識御坐所に候条、尚門徒衆之事は向後至紀州被致参詣被運寸志……仏法世間共以御門主様御詮次第可被相働事……。五月二十九日、法橋仲之(花押)・刑部法眼頼廉(花押)、ユスキ誓願寺下坊主衆中門徒衆中」(「誓願寺文書・妙輪寺由緒記」)。

(八七) 「妙輪寺由緒記」。

(八八) 「為志銀子五拾目至来誠懇志のいたり……。五月二十七日、教如(花押)、江州浅井郡湯次方直、参物門徒中」(「東浅井郡湯次

本願寺教団の東西分立

満徳寺蔵。また、慶長九年六月十日下付、「顕如絵像」教如裏書（満徳寺蔵）にも「浅井郡湯次方直、参惣道場中」とある。
 (九八) 「司鑰録」「慈敬寺由来書」「堅田殿 当山記録」など（滋賀県高島郡黒谷 慈敬寺蔵）。「本願寺通記」「大谷一流系図」。
 なお、徳川初期までの、慈敬寺略系図は左の如くである。



なお、鴨・黒谷両慈敬寺文書の閲覧は本学講師堅田修氏から便宜を得た。

(九〇) 『滋賀県史』第三卷。『高島郡誌』第二篇第四章参照。また、高島郡三浦講共有文書の（元亀元年）十二月三日、志賀高島三浦御門徒各衆中宛、下間丹後法印証念の書状に「去月廿六日於堅田不慮合戦、其方各手前無比類働、殊首数多被討捕、即時敵被討果之由注進状懸御目候、尤神妙……、猶以慈敬寺殿被申談、切々可被抽忠節事肝要候……。」とあり、同郡願慶寺文書の、（同年）十月二日、願慶寺慶乗宛、慈敬寺佐増の書状にも、「去九月廿日於四屋首一被討捕候事高名尤感悦至極……。」とある。願慶寺は三浦門徒の一員である。

(九一) 二月十三日、慈敬寺宛、顕如消息（『滋賀県史』第五卷）。なお、院家取立は、「大谷一流諸家分脈系図」によれば元亀三年である。谷下一夢氏『顕如上人伝』はこれを天正元年二月に訂正をしているが、これは元亀元年の江西の合戦を天正元年と解したためで、誤解であろう。

(九二) 二月十四日、慈敬寺宛、顕如消息に、「其表面々此方へ令一味之由、大慶此事候、殊堅田まで属理連還住由珍重候、云々」とある（『滋賀県史』第五卷）。

(九三) （天正八年）四月二十一日、本善寺宛、下間仲之・頼廉書状に、「仍、教行寺殿・慈敬寺殿・毫撰寺殿以両三人、……惣別

御両所様（頭如・教如）御間被申乱事、彼所行候、言語同断曲事被思食候条、向後之儀者、門徒衆悉被召放、則両三人身上御勘気事候……」（『頭如上人文書』続真宗大系十六）。

（九四） 天正八年七月二十三日、慈敬寺宛、教如消息（『教如上人御消息集』）。

（九五） 十一月二十九日付、慈敬寺宛、教如消息（黒谷 慈敬寺文書）。

（九六） 七月二十二日付し、かせ・舟木・畑・かも祐伝・大田・岡・わらその即得寺、惣御門下衆中宛、稲葉尚政・松尾為玄・栗津了善・栗津村昌・下間頼竜連署状に、「御所様（教如）来晦日慈敬寺殿へ被成御成候今ニ不始御事に候へ共、其許御門下衆可有御馳走候事専用候、……」（鴨 慈敬寺文書）。なお、教如のこの下向については、「本福寺草案」に慶長六年春、教如が堅田へ下り院家取立を条件に本福寺明乗の帰参をすゝめたが請けなかつたとあり、或はその頃のことかとも思われる。とすると、証智は慶長三年に死んでいるので、次の教尊の代のこととなる。しかし、文中「今に不始御事」からもわかる如く、舟木に移った慈教寺の近隣坊主との教如方への連合は、すでに証智により遂行されていたと考えられる。

（九七） ①は慶長三年七月顯智の「本願寺仏法領掟之事」とある置文、②は断簡であるが、内容から文禄四年頃に顯智が本願寺准如へ出した誓詞の案文であることがわかる。（共に、黒谷慈敬寺所蔵「当山記録」所収）。

（九八） 『教如上人御消息集』。

（九九） 「参河志」第三十五卷。

（一〇〇） 三カ寺の永禄一揆時代の末道場の数や結合関係については、笠原一男氏『一向一揆の研究』第十四章参照。

（一〇一） 裏書「妙秀妙祐真影、釈教如（花押）、天正十七年己丑六月十三日、願主釈尊祐（上宮寺感）。なお「大谷一流諸家分脈系図」では、上宮寺の勝祐（大永元年に没した勝鑑寺了頭の子）の後、了祐（正保頃の人）までを「中間不明」とし、この妙秀妙祐、尊祐の系譜は不詳である。

（一〇二） 上宮寺文書。本文書の年次は、三カ寺と本宗寺とが争つた慶長二年のものである（『愛知県史』第二巻、第七章参照）。

本宗寺は永禄一揆の後、土呂から馬頭野へ、更に額田郡福島に移った。

(二三) 註(三) 参照。

(二四) 酒井重忠の祖像幀旋については、酒井河内守宛教如書状・同家老高須隼人宛横田河内守書状(前橋市 妙安寺蔵)。また、上宮寺「過去帳」には酒井雅楽頭正親(天正四年六月六日没)を先祖よりの檀那としてあげており(笠原一男氏『前掲書』第十四章)、重忠はこの正親の子である。

(二五) 笠原一男氏『一向一揆の研究』第十四章参照。

(二六) 中村孝也氏『徳川家康文書の研究』上巻、第三篇、天正十一年条参照。なお、本書では、家成の母の法名を妙西としているが、次註の消息にいう「めうしゆん」とすべきであろう。石川一族が本証寺の有力門徒であることについては、本証寺の天文十八年門徒連判状(笠原氏『前掲著』第十四章所収) 参照。

(二七) 『教如上人御消息集』。

(二八) 井上鋭夫氏「大小一揆論」(真宗史研究会編『封建社会における真宗教団の展開』所収)。北西 弘氏「享禄の錯乱について」(大谷学報、三四卷二号)・同「大小一揆」(真宗研究、第三輯)。

(二九) 北西 弘氏「金沢御堂の草創について」(真宗史研究会編『前著』所収)では、この御坊の創立年次に疑問点を示しつつ、なお、天文十五年に、「加賀教団の中樞統制機関として」(圈点原著者) 建立されたことを認めている。

(三〇) 井上鋭夫氏「一向一揆の本質」(伊東多三郎氏篇『国民生活史研究』四、所収) 第四章参照。

(三一) 能美郡林西寺所蔵文書(笠原一男氏『一向一揆の研究』第八章所収)。

(三二) 『顯如上人文書』(統真宗大系十六)。

(三三) 註(二二)と同文書。

(三四) 辻善之助氏『日本仏教史』近世篇一、第九章第五節参照。

(二五) 本文八四頁、および註(一〇)(三) 参照。

(二六) 笠原一男氏『前掲著』第八章第二節・第十六章第一節。赤松・笠原両氏篇『真宗史概説』第三章第四節参照。

(二七) 『高田市文化財調査報告書』第四集所収。この「本誓寺由緒鑑」(元禄十五年本誓寺十四世一祐撰)には多くの文書を収め、それにより寺伝を述べているが、文書の年代設定に誤りが多く、且つ文書も真偽を混交している。今は信用しうる文書を選び、筆者で年代設定をして利用することとした。

(二八) 八月五日、本誓寺宛、教如消息に「仍於其国毎事忠功之儀無比類次第に候、……随而霜台へ音信并添愚書候、宜取成之儀所希候……」(「本誓寺由緒鑑」とあるのは、天正八年以後、同十年までのことであろう。

(二九) 米沢 康氏「越後上杉氏と越中五箇山」(「地方史研究」第五十五号)による。

(三〇) 北西 弘氏「一向一揆の解体」(「真宗研究」第八輯) 参照。

(三一) 「能登本誓寺文書」(北西弘氏「右掲論文」所収)。

(三二) 「貝塚御座所日記」(続 真宗大系十六所収本)。なお、本書によれば、閏八月十七日、下間頼廉は、秀吉の帰陣を近江坂本城に、更に同二十七日石清水八幡の橋本に迎え、大坂まで同船しているが、その時、「御座船へメサレ、(秀吉より)色々御物語ドモニテ、一段御気色よろしと也」という。すなわち、教如の北陸教団説得が功を奏したのであらう。尚、頭如は大坂城門外で迎えている。

(三三) 『石川県史』第三卷第三章所収。なお御坊再興年次については一説に天正十五年という。(北西氏前掲論文「金沢御堂の草創について」参照)。

(三四) 利家の禁制の宛所は「本願寺末寺」となっている。

(三五) 「本願寺文書」五、六。また、笠原一男氏『前掲著』第十六章第二節参照。

(三六) 「専光寺系譜」・貞享二年「専光寺由来書上」(笠原一男氏『前掲著』第八章所収)。

本願寺教団の東西分立

本願寺教団の東西分立

一五四

(三七) 『石川県史』第三卷第三章所収。

(三八) 「御裏付(注進)キ忠信(實)

人しち詰申日記

本誓寺

一番 あなミつ賢了・あなミつ海徳・くろしま無観・なわ又西念・にきし光林寺・かわらた西道・う川西祐・まちの善

四郎・くまき本浄寺・たき又祐善

二番 まちの正誓・かわらた寛誓

慶長五年三月五日

右之通写遣申候連判人無是候故如斯ニ御座候 以上

(礼紙) 利光(花押)

(石川県鹿島郡熊木村 本浄寺文書、「能州史叢」一卷二号所載)

右文中、「御裏付キ」は裏方すなわち教如方についている末寺の意。利光は利長の弟利常である。

(三九)

極月二九日、片山伊賀守宛、教如消息に「今朝羽肥前(前田利長)殿、吾等所へ御出にて候、大かたならざる御機嫌にて、
(廻炭)まはりずみなど候て、たゞ今まで御遊にて候、連々貴殿御きもいり故と、満足不過之候」(『石川県史』第三卷所収、相州

西来寺文書)という。

利長が教如を訪ね、廻炭すなわち茶湯を共にしている。本文書は、無年であるが、内容から両者の始
めての接近を示すものと考えられ、その時期は、利長が慶長六年九月、前田利常(八歳)と徳川秀忠女天徳院(三歳)と祝
言のため上洛した頃と推定する。

(四〇) (一)「於御許、御堂御建立ニ付、御位牌御守護、其御講江御頼被成候、就而者境内取締方之饒茂、可然様之御沙汰ニ候、
以上

四月七日

栗津右近 (在判)

高木兵部殿・由比勘兵衛殿・人見吉左衛門殿・山岸三十郎殿（『石川県史』第三卷第三章所収）。

この文書を、四月七日付、加州石川郡金沢末刹・七日侍講衆中宛、教如消息（『石川県史』同前）と比べると、笠原一男氏のいうごとく、文中の「御講」は七日侍講であり、高木兵部などは七日侍講の中心者であろう。しかし石川県史や笠原氏などが、両文書を慶長二年にあててるのは間違いで（笠原氏『一向一揆の研究』八二―三頁）、前者は慶長五年―八年の間、後者は、その内容が、教如の慶長八年六月烏丸七条「新屋敷仮御堂へ御移り」（『粟津日記』）に関するものであるから、慶長八年とすべきである（北西 弘氏「秘宝物語」北陸中日新聞昭和四〇・五・九号。但し北西氏は屋敷替を慶長九年影堂遷仏にあててのごとくである）。また、笠原氏は、七日侍講宛の文書を偽文書とするが、しかし同内容のものが他にも存するので、必ずしも偽文書とは考えられない。

（二）（前略）仍金沢末寺、皆々馳走候て建立之由、尤有難候、即只今、等身之御開山移置候、各被渴仰弥法儀可被相嗜候事肝要候（以下略）。

三月廿四日

教如（花押）

加州四郡惣坊主衆中・同門徒衆中（専光寺文書）。

（三）〔同内容〕

三月廿四日

教如

加賀国能登国越中国院家中一家中飛檐中総坊主中総門徒中（『石川県史』同前）。

（一）の「御堂御建立」、（二）の「金沢末寺」は、共に教如方の金沢御坊を指す。なお、（三）は北西 弘氏の提供による。

（三） 現在、五カ山には、教如下付の本尊が、少なくとも二幅存するが、共に年次は不詳である（井上鋭夫氏「一向一揆の本質」『国民生活史研究』四、二九九頁、一覽表参照）。

（三三） 正月晦日、浄興寺宛、教如消息（『高田市文化財調査報告書』第三集）。

本願寺教団の東西分立

(一三) 六月廿日、越後国惣坊主衆中同門徒衆中宛、教如消息(『同前』)。

(一四) 「東派一流系図」(統真宗大系十六)。「本誓寺由緒鑑」(高田市文化財調査報告書)第四集。なお、光暁院は玄耀院の姉であるから、後者が本誓寺へ嫁いだ慶長十年(本誓寺由緒鑑)より遡つて、浄興寺へ嫁いだと推定される。

(一五) 教如が直接出したものに、(一)七月十八日、越後所々講衆中宛、(二)十月九日、越後府内春日廿八日講中・廿四日女房講中宛、(三)六月十三日、同前宛、(四)六月廿三日、本誓寺下越後下郡惣中宛(東本願寺普請の志)、(五)九月十日、越後府内浄興寺下坊主衆中・大町・春日・中屋敷・井々村・ツチハシ・アヤノ小路・ヤスイ・日本小路講中宛(以上『高田市文化財調査報告書』第三集・第四集)、(六)三月廿七日、越後国蒲原郡廿八日講中宛、(七)五月十二日、越後小黒村七日講中(外十六カ所)宛、(八)五月廿四日、越後古志郡白岩村惣門徒衆中高梨村講中宛、(九)六月廿七日、越後五十七村十六日講中宛、(一〇)三月廿七日、越後瀨波郡村上志衆中宛、(一一)六月廿日、越後蒲原郡大面庄オヒオリ村十四日講中(外五カ所)宛、(一二)六月廿七日、越後頸城郡五十人講中(外二カ所)宛(以上『教如上人御消息集』『同補遺』)などがある。また教如方の下間頼竜・粟津元辰からのものは、枚挙にいとまらない(『同前』参照)。

(一六) 「飛騨照蓮寺文書」(大谷大学図書館書写本)。

(一七) 笠原一男氏『前掲著』第十三章参照。

(一八) 「岷江記」。但し「白川照蓮寺由緒略記」では天正九年のこととしている。

(一九) 聞名寺文書(笠原一男氏『前掲著』第十三章所収)。

(二〇) 「岷江記」。この起請文は金森長近の客将石徹白長澄から出している。

(二一) 森岡清美氏「飛騨の毛坊主」(真宗史研究会編『封建社会における真宗教団の展開』所収)。

(二二) 「岷江記」。「白川照蓮寺濫觴記」。「同由緒略記」。「不遠寺記」。

(二三) 註(三〇)参照。

(一四四) 森岡清美氏「前掲論文」。北条秀雄氏『さな姫さまの婚礼と葬儀』。「岷江記」。

(一四五) 文明五年八月十二日、蓮如「御文」に、「ことに加賀・越中・能登・越後・信濃・出羽・奥州、七ヶ国よりの門下中、この当山(越前吉崎坊舎)へ道俗男女参詣をいたし群集せしむるよし、そのきこえかくれなし、これ末代の不思議なり」。

(一四六) 「酒田浄福寺由緒記」(天正十九年永照書、浄福寺蔵)。

(一四七) 「今度酒田津本願寺門徒之道場庄中門弟准拠可令破壊之処、彼寺之事者元来上方□致造立于今以努連統之段言上候上者、彼一字末代無相違可立置、……」。

天文十二年卯月六日 禅棟(花押)・氏頼(花押)

明願公」(浄福寺文書)

禅棟は藤島城主土佐林氏、氏頼はその子で、武藤氏の被官(佐々木求巳氏『近代之禅僧公巖師の生涯と教学』十五頁)。

なお、中世末から近世にわたる、浄福寺の寺中組織を中心とする教団構造については、森岡清美氏「近世真宗教団の基礎構造」(「日本仏教」第四号) 参照。

(一四八) 赤松・笠原両氏編『真宗史概説』第四章参照。

(一四九) 浄福寺文書。浄福寺文書。

(一五〇) 註(三七) 参照。

(一五一) 卯月十日、出羽総坊主衆中宛、教如消息(浄福寺文書)。

(一五二) 註(三三) 参照。

(一五三) 秋田浄願寺門徒宛(浄福寺文書)のは、文中「爰元之儀泉州渡御」とあり、本願寺が泉州貝塚へ移つた天正十一年のもの。又、出羽酒田永照下門徒衆中宛(浄福寺文書)にいう永照は浄福寺三世、慶長十三年四月没(「浄福寺伝灯列記」)。

(一五四) 今井兵部は近江からの移住者と伝えられるが、当地の土豪と推定されている。のち秀吉につかえ摂津關郡二千八百余石

の代官となり、伏見城の作事奉行をとめた（前掲『真宗史概説』第四章）。

（一五） 辻 善之助氏『日本仏教史』近世篇一、第九章第五節参照。

（一六） 上原芳太郎氏『本願寺秘史』第二、四九項参照。

（一七） 笠原一男氏『真宗教団開展史』第八章。同『中世における真宗教団の形成』第十章。千葉乗隆氏「真宗門徒の組織―特に惣・講について―」（『仏教史学』第九卷第二号）。

（一八） 粟津文庫（大谷大学図書館蔵）。

（一九） 六月二十日、同講宛、教如消息（『教如上人御消息集』）。

（二〇） 『教如上人御消息集』、『同補遺』、『本願寺文書』。

（二一） 「態一筆令進候、仍其方三浦より御寄進米、前々者損決^{（カ）}なと一粒取申事無之儀候を、近年菟角被申段一向難心得次第候、殊去年者堅田弥衛門方へ壱石御渡し候由被申上候、言語道不可云候、殊更近年高嶋南市祐珍方へ堅被申入由申候き、不相届候哉、惣中より御志の事候者、縦損決^{（カ）}行申候共、為惣中御調候へき事を、恣之段無覺悟候、依而返事丹後殿へ可令申候、きと返事待入申候、委曲尚孫右衛門可被申候、恐惶謹言、

天文十四、二月廿七日

秀種（花押）

今津・海津・大浦惣中」（傍点筆者）（海津 願慶寺文書）。

右の差出人秀種は不詳であるが、文中の丹後殿は本願寺家臣下間光頼（天文十八年卒）に当り、秀種も本願寺家臣の一員であることが推定される。

（二二） 「天文日記」天文十二年九月七日条、同八年八月二十五日条。

（二三） また、註（九）参照。

（二四） （天正八年）後三月二十五日、三浦坊主衆門徒衆中宛、（同年）五月十三日、同所宛、（同年）八月十六日、同所宛、各教

如消息（高島郡三浦講共有文書）。

（六五） 十月十五日、江州海津今津大浦宛、下間按察法橋（頼竜）書狀（三浦講共有文書）。

（六六） 寛文四年八月十三日「三浦坊主講中可相守掟之事」（三浦講共有文書）。今津西福寺、海津願慶寺など十六カ寺が署名している。

（六七） 寛文四年七月廿日、海津今津大浦御坊主衆中宛、廿人講・三条講・二条講・五条講・新町講・橋詰講・柳馬場講・寺内講各物代十六名連署狀（三浦講共有文書）。

（六八） 貞享三年四月五日、江州高島郡三浦十三日坊主講中宛、（東本願寺家臣）石井隼人・栗津勝兵衛書狀（三浦講共有文書）。

（六九） 文政二年四月 日、東本願寺集会所宛、三浦講物代口上書（三浦講共有之書）。

（七〇） 「本覺寺御書由來書」（幕末頃。東淺井郡丁野 本覺寺蔵）。

（七一） 十月十五日、江州北郡十五村内講衆中宛、教如消息。同日、江州北郡了円了乘十五村講中宛、（下間）少二法印頼脈添翰（本覺寺蔵）。

（七二） （慶長七年）七月十八日、洛陽三条講中宛、教如消息に「其元各法儀堅固候哉、無心元候、……なを泉竜寺可申候」（『教如上人御消息集』）とあり、この泉竜寺は、本文中の本覺寺了円了乗を取調べた泉竜寺と同一人である。尚、同意の教如消息は、伊勢惣坊主衆中門徒衆中宛（同）、越後国惣坊主中門下中宛（同）、石見国惣坊主衆中門徒中宛（同）、但馬国惣坊主衆中門徒衆中宛（同）、などがある。

（七三） 岡崎正謙氏「洛陽二十人講について」（大谷派宗史編修所「宗史編修所報」第一号）。

（七四） 森岡清美氏『真宗教団と「家」制度』第七章。笠原一男氏『一向一揆の研究』第十章などの諸著。

（七五） 北西 弘氏「一向一揆―段階規定をめぐって―」（『教化研究』第二十七号）、同「中世における真宗寺院と在地の諸関係」（『印度学仏教学研究』第三卷二号）。

本願寺教団の東西分立

(一七) 拙稿「近世仏教々団の構造的変化―本願寺教権の形態を中心として―」(『近世仏教』第一卷第二号)。

(一七) 拙稿「近世における真宗末寺の性格―近江湖北十カ寺教団の変容について―」(『日本仏教』第六号)。

(一七) (天正十三年) 五月廿七日、石原新丞・松村勝口宛、(下問) 少進法印仲康書状(谷下一夢氏「顕如上人伝」所収、長安寺文書)。本文書は『近江栗太郡志』巻二にも載せているが、読解不充分のため、『顕如上人伝』によつた。尚、谷下氏同著

によれば、石原・松村は近江野洲・栗太両郡の首領であり、また、長安寺には同意の両郡坊主衆・門徒衆宛のものが存する。

(一七) 『近江栗太郡志』巻二、第二編。

(一八) 「大谷一流諸家分脈系図」(統真宗大系十六所収)によれば、教如の女子光暁院は淨興寺教善の室、同寺宣性母、同じく女子玄耀院宣由は本誓寺宣英の室、同じく姉某は西光寺善秀の継母、同じく女子教応は本瑞寺從増の室、同寺宣了の母、同じく女子宣妙は専光寺康熙室、同寺康授の母、同じく女子教証院如頼は勸婦寺玄誓の室、同じく女子如尊は興善寺教尊の室、同寺宣尊の母、同じ女子寿正院教栄は教行寺寿詮の室、同寺從海の母、同じく女子某は願得寺琢悟の母、同じく女子教妙は本徳寺寿継室、從継等の母である。また、森岡清美氏『前掲著』第七章参照。

(一八) 難波御坊開創については、「重要日記抜書」(大谷大学、栗津文庫)に、慶長五年六月十日以降、教如の大坂下向が頻出するので、この頃開創され、ここへ赴いたものと考えられる。慶長三年の開立ともいう(『天満別院誌』参照)。天満御坊開創については、同「抜書」慶長六年十一月十日条に「大坂天満(御坊)移徙、七昼夜、御式上様(教如)」とあり、此年創立された。(また『天満別院誌』参照)。茨木御坊開創については、同「抜書」慶長八年十月二十九日条に教如の「茨木へ御下向」をのべ、同十年九月二十二日条に「茨木御坊へ御取越ニ御成」とあり、以後、十一年十月、十三年十月にも茨木御坊報恩講をつとめ、また『教如上人御消息集』の某年九月十七日、摂州大田郡芥川郡惣門徒中宛、教如消息には「然は茨木にいて御堂建立候、其元諸事馳走頼入候」という。伏見御坊開創については、同「抜書」慶長五年七月十八日条に「從伏見御影四幅御越被成候」とあり、翌年十月九日「伏見へ御下り被成報恩講あり」とあり、以後、教如の伏見下向が頻出する。

大津御坊開創については、「大谷一流諸家分脈系図」光寿（教如）の項に「慶長五年六月廿八大津坊遷仏」とあり、「御堂日記」（大谷大学蔵）同年七月八日条に「大津へ輪番徳蔵寺被指越候」といへ、同「拔書」に教如の大津下向が頻出する。

福井御坊開創については、「大谷一流諸家分脈系図」の本瑞寺（福井御坊）の部に「当寺者慶長十年創建、同十五年信浄院（教如）僧正女龜子入寺、…後從増法印入而配之」という。

（一八二）『本願寺誌要』第七章参照。

（一八三）森岡清美氏『前掲著』第七章参照。

（一八四）大桑 斉氏「近世真宗教団の形成」（『金沢大学法文学部論集』第九集）。